
光の砂漠 闇の迷宮

招夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光の砂漠 闇の迷宮

【Nコード】

N1520W

【作者名】

招夏

【あらすじ】

世界が崩れ落ちる時、人は何を守りたいと思うのだろうか。

無駄なものをそぎ落とし、余分なものを削り取り、必要なものさえ切り崩しながら、最後の瞬間まで守り抜いた一欠片は、どんな色をしているだろうか。どんな輝きを放っているだろうか。

惑星ハルシリーズ第三弾 スペースファンタジー

惑星ハルの世界観

惑星ハルの世界観

惑星ハルと現状

惑星ハル（地球型惑星 公転周期398日）衛星数3つ

衛星（1） ルシフェル（赤い月）

衛星（2） ウエスペル（黄色い月）

衛星（3） フォボス（いびつな月）

中心の恒星 ジタン

（主系列星末期状態 主系列星とは中心部で水素の核融合反応を起こしていて、星の一生で最も長く、最も安定した期間。太陽も現在の段階にある）

惑星ハルは、地球に良く似た水の惑星だった。八つの大陸があったが、地球に比べると圧倒的に陸地の面積が少ない。現在は砂漠の惑星。

惑星ハルが公転している中心の恒星はジタン。ジタンは太陽と同様に水素の核融合反応を起こしているもっとも安定した期間にあったが、五百年ほど前から、主系列星をはずれつつあった。

そして、悲劇は起こった。

暴走し始めたジタンに、まずハルの極冠の氷が解けた。解けた氷は、さして大きくはない惑星ハルの大陸をじわじわと飲み込んだ。六千メートル級の高山の頂を残し、一旦ハルは青い水球となった。当時文明を築いていた人類は、逃げ惑った拳銃、わずかに残った山頂の陸地を拠点として地下都市を形成し、細々と暮らしていた。次

いで大地は干上がり、惑星ハルは完全に生物を拒絶する不毛の大地となった。これがジタン末期の大災害である。

このストーリーは、ジタン末期の大災害から数百年経った惑星ハルが舞台となっている。惑星ハルの地表は、火星に似た赤褐色の荒漠とした砂漠が広がる大地となっている。

惑星ハルの居住地域

惑星ハルで、生物が生存している地域は四か所（生存の可能性も含む）

- (1) 地下都市ハデス
- (2) 地表の森アール・ダー
- (3) 地表の街ヴェスヴィウス（人を寄せ付けぬジャングルになってしまったと言われている）
- (4) 地表の村ダイモス（流星群に直撃されて壊滅した）

惑星ハルに存在する文明

末期の惑星ハルに存在していた文明は人類が築いていたが、人類は三つの種族に分かれている。

(1) 一般人

標準型の人類、地下都市ハデスで暮らしている。科学技術を進めることによって、ハル文明を存続させる役割を担っている。ハル連邦政府はほぼ一般人で占められている。人口は三つの種族の中で最多。

(2) ファームの民

地下都市ハデスで暮らしている。(おもに地下都市のバイオラングであるエリアEに居住)体内に葉緑体を持ち、光合成をする。地下都市の植物管理にあたっている。忍耐強く、やや排他的な性質をもつ。

(3) 森の民

地表の森アール・ダーに住んでいる。見かけは一般人と同じだが、植物を操る能力を持っている。病弱。特殊な力を持つ為にハル政府が手厚く保護・管理している。地下都市での寂光下でも光合成ができるなどの有用な植物を生み出す役割を担っている。

森の民の力の源は未だに解明されておらず、森の民を分解再生するとその力が失われてしまうことが確認されている。人口は三つの種族の中で最少。

ハル連邦政府の方針で、地上と地下都市は隔絶されていた。一般人とファームの民が地上で暮らすことはなかったし、森の民が地下都市で暮らすことは、一部の例外を除いて、ない。

ハル連邦が誇る科学技術

メインコンピューター ハル

ジタン末期の大災害以降、人類を生き残らせる為のサバイバルプロジェクトを遂行する為、様々なプログラムを管理統括している。また、その他のコンピューターおよびアンドロイドを統制している。

アンドロイド

トウキ型（セキュリティ担当）、ムラサキ型（エデュケーション担当）等がある。

大脳コンタクト

直接人間の脳にアクセスできる器械。大抵は対で使う。ヘッドホンのような器具を頭に装着すると、言葉を交わすことなしに相手を考えていることがダイレクトに伝わってくる。だから言語が違っていても伝わるし、相手が見たものの記憶をまるでその中にいるように見ることができる。記憶を記録したり、逆に情報や記録を他者に定着させたりすることもできる。

分解再生装置

あらゆるものを分子レベルまで分解し、逆に再生できる装置。この装置の開発により、地下都市の生活レベルが格段に向上した。

地下都市ハデスにおけるエリア区分

エリアA

ハル連邦政府の中核および、関連施設群があるエリア。一般人のほとんどは、このエリアで働いている。

エリアB

メインコンピューターをはじめとする様々な制御システムが集積されているエリア

エリアC

居住区。すべての国民は政府によって居住スペースを与えられているが、政府への貢献の度合いによって居住スペースに差がある。

エリアCは地下都市内部の複雑な地形を利用して、隙間スペースのような場所に住居がある者もいる。

エリアD

備蓄倉庫等が集まった補給部エリア。基本的に、個人は所有できる物品数に制限がある為、不要かつ余分な物の処分を徹底指導されるが、緊急に大量に必要なになる可能性があるものは、ここで備蓄している。例えば、緊急時の食糧、医療品等。

エリアE

地下都市のバイオラング。地表の三分の一の光度を保ったジャングルエリア。三分の一とはいえ、他のエリアに比べれば格段に明るい。寂光下でも育ち、効率よく光合成をおこなえる植物が集められている。

エリアF

データバンクエリア。子どもたちの教育機関（つまり学校）もここにある。

エリアG

技術作業部。あらゆる科学技術を駆使した装置や機械は、すべてここで造られる。大脳コンタクトや分解再生装置のメンテナンス等もここで行われる。

エリアH

医療センター 精神と健康を保つための、トレーニングマシンや遊戯施設などもここにある。

主要登場人物

主要登場人物

カナメ・P・グラブラ

一般人 男性 主要エンジニア 再生分解装置の開発者の一人（分解担当）

デイモルフオセカ・オーランティアカ 森の民 女性 逃亡中

ルド・B・ラキニアータ

一般人 男性 地下都市ハデスの市長。ハル連邦公安委員会委員長

イブキ・ピラミダリス

一般人 男性 主要エンジニア 再生分解装置の開発者の一人（再生担当）

コブ・ケルクス ファームの民 男性

フェリシア・アメロイデス 一般人 女性 ハル連邦政府官吏

トウキ セキュリティ担当アンドロイド（少年型）

プロローグ

世界が崩れ落ちる時、人は何を守りたいと思うのだろうか。

無駄なものをそぎ落とし、余分なものを削り取り、必要なものさえ切り崩しながら、最後の瞬間まで守り抜いた一欠片は、どんな色をしているだろうか。どんな輝きを放っているだろうか。

惑星ハルの最深部。地下都市ハデスは常に薄闇だ。朝なのか夜なのか、それを知っているのは、黙々と時を刻む時計のみ。

ハル連邦政府の中枢機関があるエリアAに限れば、巨大なスペースを有する地下都市なのだが、それ以外のエリアは割とこじんまりしている。特に、それぞれのエリアをつなぐ回廊ときたら極狭で、背の高い者ならば、かなり圧迫感を感じる高さだ。その狭く薄暗い闇の中に、道は迷路のように敷かれていた。無論、わざわざ迷路にするために道路を作ったわけではない。この地下都市は、元々、地底奥深くにあつた空洞を利用して作られたものなのだ。故に道も自然の造形そのままに迷路のように曲がりくねっていた。イメージとしては人間版アリの巣の様なものを想像してもらおうといいだろう。

地底奥深くに穿^{うが}たれた無数の空洞の集合体。
それが地下都市ハデスだった。

電力の使用量を極限まで絞りこんでいるため、必要のない場所は特に闇が深い。主要道路こそ舗装してあるが、脇道に逸れればこつこつとした土の道に変わる。にもかかわらず、そこには一本の草さえ生えていなかった。

ここは惑星ハルを暑く輝り焦がす恒星ジタンの光さえ届かない奈落の底……。否、よく目を凝らして周囲を見てほしい。そうすれば、

天井や壁のそこここに、ひっそりと光る付着物に気づくことだろう。光苔の一種だ。その幽かな光は、地下都市ハデスが真の闇に呑まれることを、かろうじて引き止めていた。

奈落の底の一步手前の薄闇に、惑星ハルに存在する唯一の国家、ハル連邦の中枢機関が設けられたのは、既に数百年余も前のことだ。

この国のありようは、まさにこの国が、ひいてはハルという惑星が置かれている状況を的確に表していた。文明のみならず、母惑星ハル自体が、ギリギリの崖っぷちで、奈落の底に落ちていくことから踏みとどまっていた。

第一話

人氣が途絶えた暗闇の中、女は住居の壁面を擦っていた。ザスザスと硬い壁面を擦る音が闇に吸い込まれていく。

どうして……女は思う。どうして、こんなに光ってしまっただろう？

答えは出ていた。かそけく光るその光が、自分と愛する家族を闇に引きずり込もうとしていることも知っている。それでも女は、その答えを打ち消すように壁を削り続ける。

突然、背後から聞こえた明朗で快活な声に、女ははっとして振り向いた。

「奥さん、困るなあ。光苔は政府によって繁殖させられている、いわば公共物だ。それを、こんなに擦り落としちまって……」

公安の職員を従えた、すらりとした長身の男が立っている。歳の頃は四十代半ば、しかし、その若い容貌とは裏腹に、彼が遙かに長い年月を生きている人間であることを、この地下都市ハデスで知らないものはいない。銀色の鋼のような髪に冷徹無比なアイスグレーの瞳、国家公安委員会の委員長であり地下都市ハデスの市長、ルド・B・ラキニータは、穏やかで砕けた口調でありながら、大抵の者を竦みあがらせてしまう存在だ。

「ひっ……」

女は息を呑むと、大方の定石通り竦みあがった。

「ママあ？ どこ？ リリイ寂しいよお」

その時、稚い声とともにドアが細く開き、中から三歳くらいの小さな女の子が顔を出した。亜麻色の長い巻き毛にサファイアの瞳。

「ほお。これは見事な森の民だ」

ルドは目を細めて嘆息すると、鋭い瞳で女の子を凝視した。

「リリイっ！」

母親は慌てて娘を腕の中に抱きしめた。無論ルドの視線から隠す為だ。

「奥さん、その子を渡してもらおうか。ちょうどその子が生まれたあたりからだそうじゃないか。光苔がこんなに光るようになったのは」

ルドの朗々とした声が、闇の中で閃く鋭利な刃物のように響いた。「違います。この子のせいじゃない。この子は森の民なんかじゃないわ！ この壁は前からこうだったのよ！」

女は絶叫すると、リリイを抱きしめたまま部屋の中に飛び込んで鍵をかけた。

「やれ！」

ルドの一言で、公安隊はあつという間にドアを開錠し、家の中へと乱入した。女の悲鳴と子供の泣き声が闇を切り裂く。

「トウキ、女を処分する。子供を確保しろ」

トウキと呼ばれた少年は、軽く頷くと、部屋の隅で抱き合って震えている母子と対峙した。

トウキは目を細め、手を伸ばすと怯えた表情の母親の眉間に指先で軽く触れる。女は、一瞬大きく目を見開いた後、クタリとその場に倒れこんだ。

「ママっ？ ママっ！」

母親に縋りついて泣く子供に、トウキは静かに話しかける。

ママは少し疲れちゃったんだ。眠っているんだよ。静かにしてね。

その優しげな声は、直接リリイの脳内で響いた。だから半狂乱になつて母を呼ぶリリイにも届いたのだ。はつとしてリリイはトウキを見つめる。人懐こそうな深い紫色の瞳。トウキはその場に相応しくない程、何事もない様子で穏やかに微笑んだ。

「ママは、眠っているの？」

床に倒れこんでいる母親は、確かにただ眠っているだけのように見える。

そうだよ。ほっぺだってこんなに温かい。リリイは、縋りついた母親の胸に顔を埋めた。いい匂い。

ママの匂いは、いつだってリリイを安心させる。

ほら、胸だつてちゃんとトクントクンって動いてる。このお兄ちゃん言う通りだ。

「そうだよ。あっちのおじさん達が、ママにお話しがあるんだってだから、少しママとはお別れだよ」

今度は、トウキも声で対応する。

「やだ、ママと一緒にいる」

リリイは、再び母親に縋りついた。

「君と一緒にいると、おじさん達もママもお話ができないよ。後で必ずママと会わせてあげるから、いい子でいようね。用事が終わるまで僕がついていてあげる。僕はトウキ、君を守るものだよ」

「トウキ？」

「そう」

「後でママと会えるの？」

「ああ、必ず会えるよ」

トウキは、揺るぎない様子で頷いた。

トウキが会わせるといふママと、本来の母親が、確かに同一人物なのかなどと、僅か三歳のリリイに、どうして疑うことができただろうか。リリイはトウキの言葉を信じ、従った。

『森の民』の力は、植物を操る力。力を発症した者は、地下都市には居られない。当時のハル政府は、森の民を保護すると言つ名目で、捕獲し、隔離し、管理していた。それこそが、地下都市の子を持つ親が、力の発症を極端に恐れていた理由だった。

第二話

ハル連邦公安委員長室に、足音も荒く一人の老人が入ってきた。白髪に褐色の鋭い瞳。深い皺が刻まれた色素の薄い顔には、怒りが濃く滲んでいる。

「ルド、昨夜保護した森の民の母親を、その場で処分したと言うのは本当のことなのか？」

老人は、デスクで市長専用端末に向かっているルドを睨みつけた。「おお、カナメか。何だ？ お前、いつまでそんなヨボヨボの姿でいるつもりなんだよ。俺より年下の癖に……。まさか、俺より年上に見せたいが為にそうしている訳じゃあるまいな。それが理由なら、ちと子供っぽ過ぎないか？」

ルドは端末から目を挙げると、目を細めて悪戯っぽく笑んだ。

「質問に答えろ、ルド」

子供っぽいと言われた老人は、眉間にしわを寄せて更に詰め寄った。

「ああ、本当のことだ。仕方がなかったのさ。少し前、おまえが言ったように、森の民の子供を匿った母親を見逃してやったことがあるんだが、その母親どうしたと思う？」

ルドは、口をへの字に曲げて続けた。

「子供に会いに行く為にガイアエクスプレスに忍び込んで、アール・ダー村に入ろうとしたんだぜ？ ハデスの無修正情報がアール・ダーに入ってみる、プランDはめちゃくちゃだ。お陰でアール・ダーの入村管理システムを強化する羽目になったんだぞ？ お前のクレジットから人件費を引いてやろうかと思っただくらいだ」

ルドはアイスグレーの瞳で上目づかいにカナメを見つめながら、両手の長い指を開いたまま軽く打ち合わせた。

「それとこれは別件だ。ハデスでは、いつから他人の罪まで償わな

ければならなくなつた？ 命を軽く扱うなといつも言っているだろう？」

カナメはルドを睨みつける。

「その命の重みとやらを軽くした張本人に言われたくねーな」

ルドは、端末のキーを乱暴に叩いて終了させると、片手で頬杖をつきながら挑発的にカナメを見上げた。

「……」

カナメは、歯ぎしりをしてルドを睨みつける。

「昨夜のあのチビの目、お前に見せたかったぜ。燃えるようなサファリアブルーの瞳をしていな。思い出したよ。アイリスをな。あのチビは役に立つ森の民になることだろう」

カナメは、ルドの言葉に益々怒りの度合いが高まった様子でこめかみをピクピクさせていたが、しばしの沈黙の後、無言のまま踵を返すと市長室のドアの開閉ボタンを叩き壊さんばかりの勢いで押した。そして振り向きざま、ルドをねめつける。

「僕が、どうしてこんなじじいの姿のままにいるか教えてやるうか？」

カナメの瞳が、憎々しげにルドを見下ろす。

「あんたを殴り殺さないでいられるようにだ」

カナメはそう言い捨てると、肩をいからせて出て行った。

「やれやれ、歳をとると怒りっぽくていかな」

ルドは唇を歪めて微笑すると、再び何事もなかったかのようにデスク上のモニターを睨みつけた。

地熱でむせかえる路地を抜けて、警備の厳しい居住地区のエリアゲートをくぐる。利き腕ではない方の腕に書き込まれた生体認証システムのデータで通行許可が下りる仕組みだ。

「異常はないか？」

カナメは警備員に問いかける。

「ええ、全く問題ありません」

恰幅のいい警備員は敬礼してカナメに返答した。

「御苦労」

カナメは警備員に軽く敬礼を返すと、無表情のまま中へ入った。カナメはエリアC特別居住地区で一人暮らしをしている。長年の政府への功績を認められ、一人暮らしにしてはかなり広めのコンパクトメントを用意されていたが、たまに帰るその部屋は、まるで他人の家のように肌になじまずよそよそしい。

カナメは上着をリビングのソファに投げ捨てる、深いため息をついた。

アイリスの名前を聞いて、思った以上に激昂してしまった自分に腹が立つ。年甲斐もなく怒り、怒りにまかせて早足で家まで戻った。息が切れる。

その時、それは唐突に起こった。

「うっうっ！」

激しい胸の痛みがカナメを襲う。机の引出しにある薬を取り出すうともがいたところでカナメは気を失った。取り出しかけた薬の瓶が床に転がり、中の錠剤が床一面に散乱する。

後は、ただ、闇……。

* * *

赤いライトの明滅が緑に変わった途端、カナメは深い沼の底から引きずり出されるように目覚めた。

見慣れた部屋、見慣れた機械、いつもの威圧感のある重苦しい空気。

カナメ、キブンはどうです？

いつもの気遣わしげな声が頭の中に響いてくる。

「……………」

最悪だ。

しかし答える必要などない。ここにいる限りすべてを把握されているからだ。脈拍だって血圧だって脳波だって、体調だろうが、気分でさえ、お見通しなのだ。聞く必要のないことを何故訊くのか。カナメはイライラと起き上がる。

イライラしていますね？

声はどこまでも優しげだ。

「……………」

カナメは、目の前の精密な機械をハンマーでたたき壊す……想像をしてイライラをやり過ぎた。

ハッケンがアトイチジカンオクれていたら、サイセイできなかったかもしれない。ですからイツコクもハヤクサイセイチリヨウをウけるようにすすめていたのですよ。

あと一時間……。

一時間先にあつたはずの別の未来を思い浮かべてみる。冷たい骸となつて横たわる自分。老いさらばえて、小さく縮んで見えたことだろう。しかし、その顔は平穏な表情を浮かべているに違いなかった。

深く溜息をつくとき、皺ひとつなくなつた自分の手のひらを見つめて、ギョツとした。

自分の手？

コンカイのサイセイはヒジヨウにファンテイでした。シキソのテイチャクがかなりワルかつたので、エリアEにハいるバイイはサングラスだけでなく、シャコウフクもチャクヨウすることをススメます。

再生される度に色素が少しずつ抜けていたのには気づいていた。

しかし今回のように一目で分かるほどののは初めてだ。機械の金属部分に映る自分の姿に驚愕する。二十代くらいに見えるが、髪は銀色で瞳はポモナの実のように赤い。

どうして……どうして、こんなにしてまで……。カナメは両手で顔を覆った。

どうしてこんなにしてまで、生き続けなければならぬ？

カナメ、プランEの、イチニチもハヤいシドウをネガっています。

分かっているさ。それなしに僕に平穏は訪れない。それまでは餌を鼻面にぶら下げられた馬のように、ただ疾走するしかない。分かっているとも。

カナメは体についている器具を引き剥がし、よろめきながら立ち上がると、壁のスイッチを幽かに震える手で押し、部屋から退出した。

第三話

エリアEは、地上の三分の一の光度に保たれている植物育成ゾーンだ。広さは、中枢機関があるエリアAの約三十倍、地下都市随一の広さを誇る。地上の三分の一の光度とはいえ、通常の生活エリアに比べると格段に明るい。重いドアを開けた途端、目が眩むような光に圧倒されてカナメは踏鞴たたらをふんだ。

サングラスを掛けてさえこれだ。直視すれば視神経をやられるに違いない。なんて様だ。

エリアEの管理棟まではトラムで移動する。いつものことながら、ここは酸素濃度が高い。植物たちの清冽な香り、緑陰で蠢く小さな生き物たちの息づかい、濃密な土の匂い……。どれもが少しだけカナメを落ち着かせ、浄化してくれる。

「よう、カナメ無事再生したんだってな。ずいぶん若返ったじゃないか。じじいのお前を見慣れてたから、一瞬分からなかったぞ」

同じく遮光用グラスを掛けた背の高い男が、発車間近のトラムに乗車してきた。カナメの幼馴染、イブキ・ピラミダリスは、カナメに近寄るなり拳を突き出した。カナメもニツと笑うと拳を突き出して応じる。

再生治療を繰り返し、長い年月を生きてきたカナメと同様に、彼もまた長い人生を背負っている。カナメにとってイブキは、長い時間を共に過ごしてきた親友であり悪友だった。イブキとカナメは同じ年だったが、イブキは既に五年前、八度目の再生をしていたので、今では再生したてのカナメよりも見かけ上少し歳上だ。八度目の再生後にしては色素がすっかり定着していて、未だに褐色の髪を維持している。さすがに目の色素はかなり抜けているので遮光用グラス

は欠かせないようだが。

「イブキ、なんでおまえがここにいるんだ？」

カナメは思わず緩んでしまった顔を引き締め、しかめっ面で迷惑そうに問う。

昔からそうなのだが、イブキの前では何故だか素直になりにくい。遠い昔、まだ二人が学生だった頃、優等生で通したイブキに対して、カナメは常に問題児だった。その名残で、未だに彼がいると問題児らしく振舞ってしまうのかもしれないとカナメは時々思う。

「おまえがエリアEに向かったって聞いたから一緒に行こうと思つてな。しかし、なんだ？ そのカツコ」

イブキは呆れたようにカナメの頭からつま先までをジロジロと眺めた。

「遮光服を知らないのか？ それとも、とうとうボケが来たか？」

カナメは渋面で問い返す。

「ついに遮光服の世話になることになったか……日頃の行いが悪いから、再生不良になるんだぞ」

「なに、イブキが作った再生装置がへボなもんだから、こうなつてしまっただけさ」

カナメが澄まして答えると、イブキは目を吊り上げた。

「なんだと！ 俺のマシンは完璧だとも。おまえの分解装置がへボなのに決まっている！」

二人は剣呑な様子でしばらくにらみ合った後、どちらからともなくクスクス笑い出す。

「どちらも改善個所ありつてとこか？」

イブキが肩をすくめると、

「違うない」とカナメは小さくため息をついた。

狭小な地下都市での生活を継続可能かつ快適にしたのが、彼らの開発した分解再生装置だった。分解再生装置は、あらゆる物質を分

子レベルまで分解し、思いのままに再構築する。最終的に分解再生装置は生物までも分解再生することを可能にし、結果として、再生を繰り返すことにより何百年も生き続ける人間を発生させた。生物、殊に人間に関しての分解再生については、再生の為の様々な厳しい適用基準が設けられていたが、開発者である二人に関しては、無条件で再生治療を受けられることになっていた。彼らが、何百年も生き続けることになった所以だ。

管理棟に近づくにつれ、トラムは緩やかに減速を始めた。

エリアEは、地下都市のバイオラングだ。地下都市で必要な酸素をここで賄っている。エリアEを管轄管理しているのがファームの民だ。

ファームの民は緑色の肌を持っていて、皮膚で光合成を行う。大抵が黒髪か濃い褐色の髪を持っているが、中には緑色の髪をしていて、髪でも光合成をするタイプがいるらしい。カナメはまだ見たことはない。

「コブが、倒れている僕を見つけてくれたんだそうだ」

せつかく死ねそうだったのに、という言葉は呑み込む。

「俺が様子を見に行ってくれと頼んだんだ。俺、外せないフェーズだったから」

イブキは背を向けたまま窓の外を見つめて、そう言った。

「イブキが？ 何故？」

「なんとなく、気になったから……」

イブキが振り返る。

「イブキだったのか、どうりで……」

やけにタイミングがいいと思った。

いくら職場で顔をしょっちゅう合わせる仲間でも友達でも、居住区にあるカナメのコンパートメントまで来る者は滅多にいない。カナメ自身、そう言う付き合いしかしてこなかったし、そもそもカナメがコンパートメントにいる時間など、ほとんどなかったからだ。今

回、倒れた場所が場所だっただけに、誰かが訪ねて来なければ、恐らく死後数日は経っていた筈だった。

イブキは昔からそう言う奴なのだ。こいつがいる限り死ねそうにないな。

再生治療を受け続ける身になって以来、ずっと消極的自殺願望を持って生きていたカナメは、こっそりため息をついた。

「虫の知らせってやつだな。特におまえに関しては、そう言うのをよく感じるんだ」

イブキは真顔で言った。

「……ありがたいね」

カナメはひきつった笑いを浮かべる。

「おまえ……一人で、易々と死ぬると思うなよ？」

突き刺すようなイブキの強い視線に、カナメはふと顔を上げる。

「お見通しって訳だ」

カナメは苦笑う。イブキは眉間にしわを寄せて、一瞬苦渋の表情を浮かべたが、すぐに弱く笑んだ。

「そう言えば、おまえ覚悟しておけよ。第一発見者のコブは相当動揺していたからな。泣くぞ、あれは……」

イブキは器用に片方の眉をあげて見せる。

カナメは盛大なため息をついた。

ホームで、見上げる程の大男がトラムを待ち構えていた。深い緑色の肌に黒く波打つ髪。髪は無造作に一本に束ねられている。身長百八十センチはあるカナメとイブキでさえ、小柄に見えるほどだ。

「カナメえ！」

大男はそう言うなり、太い両腕でカナメをがっしりと抱きしめた。

「コブ、苦しい……やめろ……」

「イブキに言われて部屋を覗いたら、こっちの心臓が止まっちゃうかと思っただじゃろうがっ！」

そういいながらコブはカナメをぎゅうぎゅう抱きしめた。再び心臓が止まりそうだ。

「ぐはっ、悪かったよ。頼む……放してくれ。もう二度とコブの前では死なない」

息も絶え絶えにカナメは言葉を絞り出す。

「バカたれ！ 俺の前じゃなくても死ぬなっ」

カナメは背中を強かに叩かれて、つんのめった。

エリアEは、ジャングルのような広大な森林と地下都市最大の地底湖からなる巨大なバイオラングエリアだ。ほとんどのファームの民は、ここで森林の世話をして暮らしている。中央部の湖畔に、エリアE唯一の建造物である管理棟が設置されていて、ハル政府から衣食住が提供されていたが、ほとんどのファームの民は各々好き勝手にテントや小屋を作って気ままに暮らしている。

管理棟の最上階には展望台兼談話室が設けられていて、ジャングルを一望することができる。休日ともなると、見学に訪れた子供達でザワザワしているのだが、今は閑散としていた。

ほぼ貸し切り状態の談話室で、カナメはコブのお小言を謹聴していた。

ファームの民の一部は非常に長命だ。まるで大きな木が何千年も黙々と時を刻んで存在し続けるように、コブもまた数百年という長い歳月を、再生治療も受けることなく黙々と生き抜いてきた。だから、さすがのカナメもイブキもコブの説教には頭が上がらない。

「なあ、カナメ、生きちよれば、色々嫌なこともあるじやろう。うまくいかんことだってあるさ。再生するんが嫌じゃち考えるんも無理はねえ。じゃけんがよう、生きちよってくれよ。おまえがおらんようになつたら寂しいじやろうが」

節くれだつた指で、顔をゴシゴシ擦っているところは育ちすぎた穴熊みたいだ。

「泣くなよ、コブ。僕が苛めたみたいじゃないか」

カナメは顔を顰める。苛めたのと同じだ、とコブはさらに盛大に鼻をかみ始めた。

「聞いて驚くな？ あのムラサキが心配していたぜ」

イブキが、良い報告だと言わんばかりの顔で口を挟んだ。

「大した間抜けだよ、お前は。本気でムラサキが心配すると思ってるのか？」

カナメは眉間に皺を寄せて吐き出すように言う。ムラサキは子供の頃からの養育係だ。養育係アンドロイドだと言った方がいいだろうか。

「相変わらず嫌ってるなあ。その歳で未だに反抗期か？ アンドロイドって分かっても、ムラサキに関しては、なんか感情移入しちまうんだよな。俺たちがこーんな小さい頃から面倒を見てくれるからかな？ 情が湧くって言うか……」

イブキは、親指と人差し指で五センチくらいの長さを作ってみせた。

「そんなに小さいわけないだろ？」

カナメがうんざりした顔で言う。

「うんにゃ、おめーらは本当にちっこかったっちゃ」

コブが飲み物を運んでくる。

「コブがでか過ぎるんだ」

カナメとイブキが声をそろえた。

「そのムラサキが、コブの所に行って礼を言うべきだってしつこいんで、ここに来たんだ。世話になった、ありがとう」

カナメは仏頂面だ。

「おまえ、それは礼を言ってる態度じゃないぜ」

イブキが呆れたように盛大なため息をついた。

* * *

「で？　なんで皆ついてくるわけ？」

エリアEを出て、カナメは困惑したように振り返る。

「カナメ一人で帰すわけにはいかんじやろうが。おまえの部屋は、あのままになつちよる。発作を起こしちよったから、部屋はかなり荒れとつたはずじゃ」

そう言いながら、コブが気遣わしげについてくる。

「俺は、おまえんちと方角が同じじゃないか。どちらかって言うとおまえがついて来てるように俺は感じるぜ？」

イブキは悪戯っぽく笑んだ。

「ふーん」

滅多に部屋などに帰らない癖にという言葉を懸命に飲み下す。

分かっているのだ。二人がカナメのことを心配してくれていることは……。しかし、それが逆にカナメには息苦しく、重苦しく、そして……。心苦しい。生きることへの執着が、希薄になっていくことを止められない。

「それに、最近物騒な話を聞いちよるからの」

コブが心配そうに声を潜めた。

「物騒な話？」

カナメは首を傾げる。再生治療を受けている間に何か事件があったらしい。

「ああ、それなら俺も知ってる。なんでも、留守中に忍び込んでいて、帰宅したところを襲うんだそうだ。主に女性がターゲットにされているんだってさ。それが、ここだけの話なんだが……」

イブキは声を低めた。

「バラバラにされているらしい」

「バラバラ……」

コブとカナメが同時に呻く。

「被害者は無条件で再生治療を受けられることになってるんだが、第一発見者の心的外傷がひどくてな。中にはもう二度とあんな目に遭った妻を見たくないからと再生を拒む者さえいるそうだ。まだ捜査中の事件だ。詳しい報道はされていない。必要以上に市民を動揺させたくないからな。誰にも言うなよ」

おいおい、お前が言ってるだろう？ 公道で……。

カナメは遠い目でイブキを見つめる。

「ところで、コブのその荷物はなんだ？ まるで泥棒みたいだ。何を持って来たんだよ」

カナメが怪訝そうに問いかける。

「気にせんでいい。じきに分かるからの」

コブは嬉しそうに大荷物を重そうに担ぎ直した。

居住区はエリアCにある。大抵の人は、独りなら一部屋とバス、トイレ、ダイニング付き、家族がいればその人数に応じた部屋が付いたコンパートメントを政府から貸与される。カナメは独りだったが、長年の政府への貢献を認められて、他よりもかなり優遇された住居を与えられていた。

大股で歩いてきたコブが先にカナメの部屋に到着する。大きな荷物をドサリと置き、認証カードキーを取り出そうと胸のポケットをまさぐっていた腕がドアに触れた途端、ドアは勝手に開いた。

「ありや、鍵かけるの忘れちよったか？」

頭を掻きながら荷物を背負い、中へ一歩踏み入れたところで、コブは、はっと息を飲み後ずさりながらドアを閉めた。

「おい、コブ、どうした？ 殺人鬼でもいたか？」

イブキがニヤニヤしながら問いかける。コブは真つ青だ。

「カナメが……倒れちよる」

はあ？ という顔のイブキの後ろから、ゆっくり歩いてきたカナメが問いかける。

「何かあったの？」

カナメは怪訝そうに自分のコンピュータメントを覗きこんで瞳目した。

第四話

人が倒れていた。ズタボロの服を着た少年だ。

彼の手の先でオロオロとろつき回る変な緑色の生き物。奥の小部屋にはガラスのような破片が床一面に散らばって、まるで宝石のように光を乱反射していた。

カナメは奥の小部屋の入り口で呆然と立ち尽くす。

壊れている。粉々に……。

「おい、カナメ、緊急用のインターホンを使っぞ。公安に連絡しよう。殺人鬼には見えないが……」

イブキがインターホンのボタンを押そうとした時、コブが小さい悲鳴を上げた。

「こいつ、刺しよったっ」

見れば、緑色の生き物がコブに向かってトゲのようなものを発射したところだ。

「こら！　まて！」

コブがその生き物を捕まえようと手を伸ばして、届くか届かないかの刹那、倒れていた少年の指先から光がほとばしり出た。白っぽい霧のような光がその緑色の生き物を包み込む。光を纏ったそれは、次の瞬間、薄い透明な翅を得て空中へ舞い上がった。

「森の民だ！」

カナメが呆然と、イブキが驚愕して、コブが恐怖に引きつって、同時に叫んだ。イブキはインターホンを押す手を止めて少年に歩み寄る。カナメは少年の呼吸を確認した。

「生きてる」

「生きた森の民か……」

コブは言葉もないまま、じりじり後ずさった。

「じゃあ、この生き物は植物？　まさか……アイリスの……」

パタパタとうるさく目の前を飛びまわる生き物を、カナメは信じられない気持で見つめた。

枯れかけていた。それは分かっていた。イブキが後数年はもつと保証して封印してくれたカクタス。アイリスの形見。見るたびに黒ずんで、見るたびに溜息をついていたのだ。

それが、飛び回っている。

「生きた森の民を見るのは、久しぶりだ」

イブキが呆然として言った。

「……そうだね」

カナメが同意する。

「どうする？ これ……」

カナメは困惑してイブキを見上げる。

「どうするって……」

イブキは難しい顔で見下ろした。

「公安に知らせたら罰せられるだろうか。フォボス行きかな……」

フォボスと聞いてイブキは顔を歪める。

「エリアE関連の研究施設から逃げ出したのならば、そこまでの罰は課されないだろう。捕まって怒られるくらいじゃないのか？」

イブキも自信なさげだ。

「もし地上から来たんだとしたら？」

二人は顔を見合わせる。

こうしようと提案したのはイブキだった。

まず本人に確認して、研究施設から逃げてきたことが分かれば公安に知らせる。もし、地上から逃げてきたのであれば公安には知らせない。

これは又とないチャンスかもしれない。イブキは続けた。生きた森の民を分解再生したことがない。森の民は嚴重に保護されている。それは今までに、森の民の遺体をその力を損なうことなく再生したことがないからだった。

「でも、どこに置いとくんだよ」

カナメは顔を眉間にしわを寄せる。

「ここはお前の部屋だ。所有権はお前にある」

イブキはカナメの両肩をがっちりつかんだ。

「所有権って……」

「これは落し物なんだ。そう思うといい」

「んな無茶な……」

カナメは顔をひきつらせた。

呆然とするカナメには構わず、イブキは少年の観察を始める。自分で切ったのかと疑うほど乱れたショートカットの栗色の髪、森の民特有の色素の濃い褐色の肌、少年にしては華奢過ぎる細い手足。苦しげに閉じられた目の下の隈がいかにも病的で、全体的に憐れな様子だ。

「それにしても薄汚れてるな。まずは綺麗にしないと」

イブキは少年の頬をペチペチと叩いた。

「おい少年。起きろ。おい」

ゆすつたり、たたいたりしてみるのが、うんともすんとも返事はない。

「しょうがないなあ」

イブキは溜息をつくとシャワールームをオートに切り替えた。次いでカナメに呼びかける。

「おい、その少年の服をむいて連れてきてくれ」

「なんで僕がこんなことしなきゃならないんだか……」

ブツブツ言いながら服を脱がしていたカナメの手が、はたと止まる。

「イブキっ！ これ女の子だぞっ」

「なに？」

イブキがシャワールームから驚いた顔をピヨコンと出す。

「僕はパスするよ。女の子の服脱がすのはイブキの専門だ」

「なんで俺が専門なんだよ。お前は男専門なのかよっ。女だったって、子供なんだから平気だろ。おお！ そうだ。子供ならコブが専門だ。」

「なんたつて三児の父、十三児の祖父、えつと……何人の曾祖父だっけ？」

「遙か彼方で、ことの経緯を見守っていたコブはブンブンと首を横に振った。」

「ファームの民は大抵、森の民に触れることを極端に恐れる。それは植物同様、その体内に葉緑体を持つからなのだが、それは、植物を操れるならばファームの民も操れるに違いないという思い込みに過ぎない。」

「森の民に触るなんて、とんでもねえ。おりゃあごめんだ」

「青くなつて固まっているコブに、イブキは無言でゴム手袋を手渡した。」

「こげなんでシールドできるんか？」

「コブは涙目で問い返す。」

「大丈夫だ。それに相手は気を失っている。力は使えまい」

「イブキは無責任に言い切ったが、ついさつきカナメの植物が目の前で飛べるようになったことを、コブは動転してすっかり忘れていた。カナメに至っては全くの無視で、さつさと奥の小部屋の散乱した樹脂を片づけだしている。」

「コブは溜息をつく少年、否、少女をシャワールームへと運び込んだ。」

第五話

ひどい気分だった。体が鉛のように重く、痛い。

少年と間違えられた少女、デイモルフオセカは目覚めると、自分が四角い白い小部屋の寝椅子に横たえられていることに気がついた。慌てて起きあがり、辺りをキョロキョロと見回す。

ここはどこだろう？ 確か、地下都市に侵入して……。

訳あつて地上から地下都市へ潜入し、公安から逃げ回り、見知らぬ誰かの部屋に忍び込んだ拳句、そこで行き倒れたのだとようやく思い出す。

デイモルフオセカはドアの隙間から外の様子を覗った。誰もいないようだ。

逃げた方がいい。心の中で警鐘が鳴る。

逃げなくちゃ。今しかないっ。

戸口まで全速力で走る。ドアの外に飛び出すと、周りも見ずに通りへと駆けだした。入り組んだ住宅街の小路を抜けて、人の通りがあるところまで来て一息つくつと、ようやく辺りに目をやる余裕ができた。

あれ？ 見られてる？

誰もが一樣に、怪しいものを見るような目でデイモルフオセカを見て通り過ぎる。

え？ 何？ 私、何か変？

デイモルフオセカは自分の格好を確認して赤面した。

バスローブだ！

デイモルフオセカが身につけていたのはバスローブただ一枚だけで、他には何も身に付けていなかった。真っ赤になって、二、三步後ずさると出てきた部屋に慌てて駆け戻る。ドアの前には、銀髪シ

ヨートヘアの背の高い見知らぬ男が腕組みをして立っていた。男は呆れたようにデイモルフオセカを見つめると、低い声で言った。

「まさかバスローブ一枚で通りに出ていく女がいるとは思わなかった」

「ふ、服を返してもらえませんか？」

デイモルフオセカはビクビクと男を見上げる。

女ってばれてるってことは……このバスローブはこの人が……。

デイモルフオセカは事情に気づいて赤くなり、事態が悪化していることに気づいて青くなった。デイモルフオセカの言葉には返答せず、入れという仕草だけで部屋の中へ入って行った男の後を、デイモルフオセカは仕方なくついて行った。

「で？ 君は何者で、どこから来て、何のために僕の部屋にいたのか説明してくれるかな？ ま、とにかく、座ったら？」

男は顎でソファを指すと、自分はダイニングの椅子を引っ張ってきてそれに座った。

「服を返してください。そうしたら、すぐに出て行きます。ご迷惑をかけるつもりはありませんから……」

デイモルフオセカは立ったまま俯く。

「服を返してほしいなら説明をしなさい。迷惑なら既に被っている」男は冷たく言い放った。剣のある言葉にデイモルフオセカはびくりと顔を上げる。

ところが、座って足を組んでいる男の瞳を見た瞬間、デイモルフオセカは息を呑んだ。男の目の色が、深紅で禍々しい血の色をしていたからだ。

なんてひどい充血！

ぐつと体を乗り出して顔を覗き込むデイモルフオセカに、男が反射的に体を引く。怪訝そうに首を傾げる男に、デイモルフオセカは慌てる。

「あつ、あのつ、それ、すぐに冷やしたほうがいいですよ！」
「は？」

急に男の瞳から力が抜け、ポカンとした表情になる。

「は？ って、痛くないんですか？」

「何を言っているんだ、君は？」

男は眉間にしわを寄せる。

「目が真っ赤ですよ」

デイモルフオセカの声に、男は不快そうに顔を顰めた。

「君の目は瞳が赤くなって痛くなることがあるのか？」

男は呆れて問い返す。

「え？ あ……ああ……」

言われてみれば、普通充血して赤くなるのは瞳ではなく、目の白い部分の方だ。彼のは瞳自体が赤いのだと気付く。赤い瞳など見たことがなかったので、つい動転してしまった。

「君は……初等部で苛められているだろう？ 馬鹿だって」

その男は冴え冴えとした目で言い放った。

デイモルフオセカは脱力して、ストーンとソファに腰を下ろした。

同時に男の言葉に慄然とする。

人が心配して言ってるのに、なんとという暴言。しかも初等部って言いきつたし、この人……。

初等部は六才から十五才までの子供が通う学校だ。デイモルフオセカは、十八歳、高等部だった。やせっぽちのせい、年齢よりも幼くみられることはよくあることだったが、確認することさえ考えていない様子の口調にムツとする。

「僕の瞳のことで話を誤魔化そうとしているなら、馬鹿げたことで時間をつぶさないでくれと言うよ。質問に答えなさい」

男の言葉にデイモルフオセカは小さくため息をつく。

だからあ、心配して言ったんだってば……。

「名前は？」

「……デイモルフオセカ」

「ファミリーネームは？」

「……オーランティアカ」

デイモルフオセカは投げやりな様子で名前を口にする。

「では、デイモルフオセカ・オーランティアカ君、事情を説明したまえ」

この人、裁判官……とかなのかな？ まさか公安だったりしないよね……。

自分とさほど歳は離れてなさそうなのに、やけに威圧感があった偉そうだ。男の蔑めしい表情をしげしげと見つめながら、デイモルフオセカは想像を巡らせる。

「実は……」

デイモルフオセカはソファに腰を下ろすと、言葉を探すように視線を泳がせる。

やっぱり、何とか隙を見て逃げた方が良いよね。この人絶対やばいって。どうしたらいい？

「あの……その前に、お水をもらえませんか？ 喉がカラカラで……しゃべるのが辛いんです……けど」

デイモルフオセカは上目づかいに懇願する。ダメもとで頼んでみた要求を、意外にも男は聞いてくれたらしい。盛大な溜息をつくと水を汲みに行く。男の背中をチラ見してから、デイモルフオセカは再びドアへと走った。

ダイニングでサーバーから水を汲んでいるとドアが開く音がした。カナメは慌てて振り返る。逃げ出したデイモルフオセカの後姿が一瞬だけ見えた。

「あいつっ！」

イブキめ！ あんなの押しつけやがって！ しかも、イブキの言葉なんて全然あてにならない。服がなきゃ逃げないだろ？ バスロ―ブで逃げる女がいるぞ、ここになっ！

* * *

もう、やめるっ。私、女やめるよ！ バスローブだろうが何だろうが構わない。

デイモルフオセカは構わず逃げることにした。

そもそも、自分が女だからこんなことになったのだ。男ならば、まだオーランティアカの家にいられたはずなのだ。女だから逃げるのにもあんなに苦労することになったのだ。髪だつてこんなに短くしちゃったんだし、もう、女なんてうんざりだっ！ やめる！

もう二度とここには入らない、そう心の中で誓ったはずだった。

だけど、行く当てがない。デイモルフオセカは地下へと続く階段を降りたところで蹲った。柵の中へ入る勇氣は……まだない。

カメラア……。

デイモルフオセカは頭を抱え込んだ。お尋ね者なのだということを実感する。その時、唐突に強い力で柵の中に引きずり込まれた。

「おいっ！ おまえ、ヒースの所にいたやつだろっ？」

野太い男の声に、デイモルフオセカはびくりと顔を上げる。

地下都市に来てすぐに、わけも分からぬまま下水道へ逃げ込んだ。下水道は、ハル政府の敷いた体制からドロップアウトしたお尋ね者の達の巣窟になっていた。そして、そこで出会ったのが、ヒースとカメラアだ。ヒースは森の民であることを隠し、下水道の一角に身を潜めて暮らしており、カメラアは森の民の管理官になることを拒否して下水道に逃げ込んでいた。デイモルフオセカは覚えていなかったが、目の前に居るこの男は、ヒースの部屋で自分を見たことがあるらしい。

「へえ、いい格好してるじゃねーか」

男はデイモルフオセカの胸倉をぐつとつかんだ。

「はなしてよっ！」

デイモルフオセカはめちやくちやに腕を振り回した。意図せずして拳が男の顔を殴る。男は顔を顰めるとデイモルフオセカの頬を何度も叩いた。最後に拳で鳩尾みそめちを殴られて、デイモルフオセカは崩折れた。

「ぐぐっ」

だからやめるって……言ったのに……女なんてやめるって。この力の差は反則でしょう？

上からのしかかってくる男の吐息に顔を顰めながら心の中で愚痴る。

その時辺りが青白く光った。天井からパラパラと光の粒子が落ちてくる。

「なんだ？ こりゃ？」

男がそれに気をとられた一瞬、デイモルフオセカは男から逃げ出そうともがく。しかし、それくらいのことでは逃げられるはずもなく、男の意識はすぐにデイモルフオセカに戻ってきた。

「おまえもヒースと同じ化け物なんだな？」

男はニヤニヤしながら言った。

「でも関係ねーさ。こんな光の粒がぶつたって、何の害もねー」

男の言うとおりだった。苔ほどの力では、いくら森の民の力を使おうと、できることは高が知れていた。バスローブの裾から差し込まれた男の手が、内またを撫でる。

気持ち悪い……。

悪寒とともに、体の端々から血の気が引いていくのをデイモルフオセカは感じていた。意識さえばやけてくる。森の民の力は命を消費すると言われる。それ程、体力を消耗するのだ。デイモルフオセカを絶望感が包み込む。何度か空しく抵抗した後、デイモルフオセ

力は意識を手放した。

カナメがデイモルフオセカを見つけたとき、デイモルフオセカには意識がないようだった。男が一人、覆いかぶさっている。

それを見た瞬間、カナメの頭に一気に血が上った。

「おい！」

カナメの声に、男は顔を上げて振り返った。

「なんだあ？ おまえ」

地下都市の明かりを背にして立っているカナメを、男は胡散臭げに目を眇めて睨みつけた。下水道にはびこっているチンピラだ。それはその男の風貌を一目見れば分かった。

「今すぐ、立ち去れ。そうすれば公安には黙っていてやろう。今日のところは見逃してやる」

下手に騒いで、彼女を盾に取られては困る。

「なんだとお？ おまえなんぞに何のかんの言われる筋合いはね！ お前こそ立ち去りな！」

男は立ち上がるとカナメに詰め寄ってきた。

腕つぶしに自信があるらしい。好都合だ。だてに長く生きてきたわけではない。

久しぶりの手合わせに高揚する。

いきなり繰り出された拳を避けると、カナメはすばやく男の後ろに回り込み、背後から腕を締め上げた。

「うわっ！」

男が悲鳴を上げる。

「他愛もないな。どうする？ このまま腕を折ってしまおうか？」
嗤いを含んだ余裕のある声だ。

「うっっっ」

脂汗を流し始めた男は、カナメを振り返って驚愕の色を浮かべる。強い光を湛えた瞳は血のように赤く、静かだが冷酷で残酷な色を湛えていた。まるで獲物を甚振って楽しんでる肉食獣の瞳。

「た、助けてくれっ」

男の懇願にもかかわらず、カナメは腕を締め上げた。ゴリュツと嫌な音がして、男の悲鳴が下水道に響き渡る。

「しばらく悪さができないように、外しておいてやったよ」

まるで、服についていたゴミをとってやったよとでも言うように、にこやかに言うと、カナメは手を離れた。男は痛みと恐怖に顔を歪めた後、だらりと垂れた腕を庇いながら一目散に下水道の闇に消えて行った。

「じじいのもままでなくて良かった。若いと、やはり体の動きが素早くていいな」

一人呟くと、カナメはデイモルフォセカのもとへ歩み寄る。まくれ上がったバスローブを直し背中に担いだ途端、その体の冷たさに驚いた。

「もしかして森の民の力を使ってしまったのか……」

本来ならば、壁の高い位置にしか生えていない光苔が、床面に散らばっているさまを見てカナメは納得する。

「急ごう」

カナメは顔を顰めると足早に立ち去った。

地下都市ハデスは、地熱の為に気温が常に高い。冷やす装置や器具なら五万とあるが、温めるものは乏しかった。暖かい飲み物くらいだろうか。それさえあまり人気がないので、メニューの隅っこに数種類ある程度だ。

カナメは空調を切ると、寝室から剥がしてきたブランケットをデイモルフォセカに巻きつけてソファに横たわらせた。

「おい、君、しっかりしなさい」

蒼白な顔を両手で包んで揺する。ずいぶん強く叩かれたのか、目の横の皮膚が内出血していた。カナメは自分の迂闊さに舌打ちする。あんな格好をさせていた以上、外へ出られないようにしておくべきだったのだ。彼女は逃亡中だった。止むにやまれず逃げだす可能性

があつた。

「……寒いよ、ママ……」

まだ、子供なんだ。うっかりしていた。

カナメは深いため息をついた。

第六話

「君、身分証は？」

威圧感のある巨体の警備員は、その厳しい顔を努めて和らげ、体を屈めて話しかけてきた。

「み、身分証？」

デイルモルフオセカはうわずった声で呟くと、反射的に服のポケットをまさぐった。身分証など持っているはずがないのは分かっていたが、予想していなかった質問を突然ぶつけられて、咄嗟にとった行動が良い結果をもたらした。

「家に忘れてきちゃったのかなー？」

警備員は悪戯っぽく笑った。

「ほらほら、取りに帰る！ 身分証を持っていないと公安に連れて行かれちゃうぞ？」

警備員は小動物でも追い払うように小さく手を振った。

「身分証忘れかい？」

通りすがりの別の男が警備員に声をかける。

「そうらしい」

警備員は笑って返事をした。男が左腕を軽く曲げてスキャナーに近づけると、モニターに緑色の Accepted の文字が浮かび上がった。警備員がゲートを開ける。

「子供も身分証じゃなく、生体認証システムを導入すれば良いのに、そうすれば忘れることもない。なあに、痛いつていつたって、ほんの小一時間我慢すれば済むことさ。政府は子供に甘いからなあ」

男はそう言いながらゲートをくぐり抜けた。

「まったくさ」

警備員もにこやかに相槌を打つと、男に軽く手を振る。

デイルフォセカは、男たちのやりとりをしばらくの間ボンヤリと眺めていたが、間もなく、自分がここから立ち去らなければならぬことに気がついた。なぜなら、警備員が不審気な顔でデイルフォセカを見つめ始めたからだ。

地下都市ハデス、人はこの都市をそう呼ぶ。薄闇のこの都市に、死を司る神ハデスの名を冠したのは、皮肉なのか、自嘲なのか。

あのゲートを通るには身分証が必要だ。分かったのはそれだけ。トボトボと歩きながらデイルフォセカは思案する。思うことは一つだけ。地上と地下都市を繋いでいるガイアエクスプレスの駅から、少しでも早く、少しでも遠く離れなければならないということ。

見つければどうなるのか……実は自分でもよく分かっていない。でも、家に連れ戻されて、叱られて終わりという生半可な罰では終わらないことだけは分かっていて。

更に下へと続く、細くて、暗い階段を見つけたのは、間もなくのことだった。地下都市から更に下へ降りる階段。ゲートをくぐらずに、このエリアを出られるかもしれない、自らを鼓舞し足を踏み入れた。

下りた先の錆びついた門扉をガタガタ揺ると、金属が擦れ合う厭な音をたてながら開き、僅かばかりの隙間ができた。そこは下水道だった。黴臭く、湿っていて、暗い。それでも目が慣れてくると、ぼんやり光る壁面に照らされて、内部の状況がつかめてきた。生活排水用の下水道らしい。ぬるそうな汚水が流れる溝の脇には狭い歩道があつて、どこまでも続いている。下水道は曲りくねり、分岐し、蜘蛛の巣のように張り巡らされていた。デイルフォセカはゲートをくぐり抜けられる方角を指して歩きだした。歩いた時間はほんの数分。後悔は一瞬にしてやってきた。

「どきなさいよっ！」

そう喚いてデイルフォセカを突き飛ばしたのは、長い髪をなび

かせて走ってきた女だった。彼女の後ろから、数人の男たちが追いかけてくる。突き飛ばされたデイモルフオセカは、壁に背中を強かに打ちつけた。蹲ってしまったデイモルフオセカに足をとられた男の一人が転んで舌打ちをする。逃げていた女は、すぐに捕まってしまうたようだった。男たちは女を捕まえると、デイモルフオセカが蹲っている場所まで戻ってきた。

「あんたのせいよ！ そんな所でぼんやり突っ立ってるからっ！」
女は蹲っているデイモルフオセカを憎々しげに見つめて言った。

「あ、あの、ごめんなさい」
デイモルフオセカの震えるか細い声に、男たちからヒューという口笛が起こる。

「暗いから、細っこくて分かんなかったが、こいつも女だぜ」
男たちの下卑た嗤い声があがる。不穏な空気にデイモルフオセカが後ずさると、デイモルフオセカに躓いて転んだ男にぶつかかった。汗臭く、酒臭いすえた匂いの息が顔にかかり、デイモルフオセカは顔を顰めた。

「おっと、まだお詫びをしてもらってねーなあ。お前のせいで、随分派手に転んじまったんだぜ？」

男はそう言いながら、デイモルフオセカの背中をドンつと力いっぱい押した。

「ご、ごめんなさい」

デイモルフオセカの震える声に、男たちは更に下卑た笑い声をあげた。

次の瞬間、デイモルフオセカには何が起こったのか分からなかった。男に押されて前につんのめった体を別の誰かが、更に別の向きに力任せに押したのだ。押されたデイモルフオセカの体は、女を捕まえていた男をなぎ倒し、もろとも下水の中に落下した。最後に聞こえたのは、女の「はなせよっ！」という悪態と、男たちの怒号と、共に落下した男の悲鳴だった。

* * *

すすり泣く声が聞こえた。あれは誰の声だったか……。

『ちがう、ちがうわ。この子は森の民なんかじゃない!』

必死な形相で叫んだ女の……しかし、その顔はのっぺらぼうで輪郭しかない。

デイモルフオセカは、はっと目を覚ました。

薄暗い部屋の中。扉が僅かに開いていて、隣の部屋の明かりが漏れ入ってくる。女の声は隣の部屋から実際に聞こえていた。拒絶し、すすり泣き、呻く声。幾人かの男たちの息を弾ませた声や、他にも女が居るのかさざめき笑う声や、嬌声も聞こえる。デイモルフオセカは耳を塞いだ。

その時、部屋の奥から小さな足音が響いて、ドアをきっちり閉める。隣の部屋の音は遮断され薄暗い部屋は静寂に包まれた。

「おまえ、下水に落ちてラッキーだったな。臭くてヤルきにもならないって、みんな文句言ってたぜ?」

デイモルフオセカは驚いて声のする方に目を向けた。デイモルフオセカと同じくらいの年頃の少年が部屋の隅のソファに座っている。

「あ、あの?」

「俺はヒース、おまえは?」

ヒースと名乗った男は、灰汁色の髪とアイスグレーの瞳を持っていた。

「デイモルフオセカ……」

「なんだって? ずいぶんややこしい名前だな」

ヒースは顔を顰めた。

「友達は、私のことをディムと呼ぶけど……」

「俺は、おまえの友達じゃない」

「……そだね」

「でもデイルムと呼ぶか。面倒くさいからな」

「……うん」

「じゃあデイルム、説明しておこう。ここで無事に生きていたいと思うなら、俺の言うことを聞くことだ。この男たちは俺の言うことなら聞く。俺の一存で、おまえは男たちの慰みものにもなるし、無事でいられることにもなるという訳だ」

ヒースはそう言って意地悪そうに笑った。

「あの人は、あなたに逆らったの？」

デイルムフォセカは閉じられたドアを見る。

「あの女は話しにならなかった。喚き散らして人の話を聞かないから、好きなようにしろって言った」

「ちがう……」

デイルムフォセカは黙り込む。

「ちがうって何だ？」

ヒースは怪訝そうに眉間にしわを寄せた。

「あの人は怯えてただけ。あなたの話を聞かなかったんじゃないよ、聞けなかったんだよ」

デイルムフォセカは、あの女の追い詰められた目を思い出す。

「おまえ、馬鹿じゃないの？ あの女は自分が逃げる為に、おまえを盾にして男もろとも下水に落としたんだぜ？」

ヒースは馬鹿にしたように嗤った。

「分かってる……分かってるよ」

デイルムフォセカは小さくため息をついた。

何時間か経った後、隣の部屋は静かになった。男たちがいなくなったのを見計らって、デイルムフォセカは女を奥の部屋へ運び込んだ。ヒースが渋々許可してくれたのだ。女は半裸状態で、いたるところに内出血の痣があった。

「ひどい……」

デイルムフォセカは、ヒースが自分に貸してくれた大きめの夕オ

ルを彼女に羽織らせる。彼女がどういう目に遭ったのか分からない歳ではなかったが、何をしたら少しでも楽にしてやれるのか、知識も経験もなかった。

女はキツと恨めしそうな顔でデイモルフオセカを見上げた。

「あんたのせいよ。あんたのせいで、あたしの人生はめっちゃくちや。なんであたしが……なんであたしが、こんな目に遭わなきゃならぬいの？」

赤い髪を振り乱して、女はわめき散らした。

「……あなた、どうして、あんな所にいたの？」

デイモルフオセカは躊躇いがちに問いかける。

「それはあたしのセリフでしょ？ あんたがあんな所にいるからっ！」

女はまくしたてた。

「そうじゃなくて、どうして下水道なんかにいることになったのって訊いてるんだけど」

「逃げてるからに決まってるじゃない。こんな所に好きで来ると思う？ あたしは森の民の管理官なんかになりたくなかったのよ！ あんな人たちと関わりたくなかったのっ！ 拒否したら、国家反逆罪になるぞって脅されて。だから逃げ出したのよ！ 他にどうしろって言うの？」

デイモルフオセカは女の言葉にたじろいだ。思わずヒースの顔を見ると、彼は能面のような顔をして女を凝視していた。

「あの……森の民と関わりたくないって、それって……」

デイモルフオセカは口ごもる。

「当然だな」

その時、突然ヒースが甲高い声で言った。

「あれって、感染^{うつ}るらしいじゃないか？ 俺だっでごめんだ」

「感染^{うつ}るって……」

何が？ と訊きそうになってデイモルフオセカは顔を歪める。無意識に女から体を引いてしまう。その僅かな動作に女が反応した。

「あたしは関わってないわ。感染ってないわよ！」

女に睨まれて、デイルフォセカはびくりと肩を震わせた。

「だが、あんた、もう元の生活には戻れないぜ？」

ヒースは冷たく言い放つ。

「ここは腐りきったハデスより更に腐った場所だ。もう分かってるんだろう？ここで、俺の言うことを大人しく聞いて生きていくか、別の場所へ逃げてそこで更にひどい目に遭うか、どっちかだな」

「なによそれ。あんた何者なの？」

睨みつけて咬みつく女に、ヒースは容赦ない平手打ちをくらわせた。

「人に名前を聞く時は、まず自分の名前を名乗るのが礼儀ってものだ」

その顔は憎悪に満ちていた。

「あ、あたしはカメラリアよ」

女は怯んで、うわずった声で名乗る。

「それでいい。俺はヒース。カメラリア、一ついいこと教えてやろう。ここに住んでる男たちだがな、まだたくさんいるぜ。ろくでもない奴らばかりさ。この部屋だけは、俺が許可しなければ入ってこれない。この部屋にいられるかどうか、あんた次第ってことだ」

ヒースの言葉にカメラリアはびくりと体を震わせた。

「ねえ、ヒース、訊いてもいいかな？」

気絶するように眠り込んでしまったカメラリアにブランケットを掛けながらデイルフォセカは話しかけた。隣の部屋は酒盛りでも始めたのか、ドアを閉めていても騒々しい声が微かに漏れ聞こえてくる。

「なんだ？」

小さな明かりで本を読んでいたヒースが顔を上げた。

「ヒースは、どうしてここに……」

デイルフォセカの言葉をヒースが遮る。

「俺がどうしてここにいるかは教えるつもりはないぜ。事情があるから、それだけだ」

そう言い放つと、ヒースは再び本を読み始めた。

この部屋には上等そうな家具が一式揃っていた。柔らかそうなスプリングのきいたベッドも、温かな色のソファも、読書用の小洒落たランプも、小さなテーブルと椅子も、飢えないだけの食料と水も、書物も……。

「外の男の人たちは、ヒースの何なの？ 友達？ 親戚？」

「冗談はやめてくれ。俺が一番関わり合いになりたくない連中だ」

ヒースは不快そうに顔を顰めた。

「勝手に住み着いてるんだ。追い出す理由もないし、面倒くさいから放つてある。それだけだ」

「ふうん。ずっとここに一人でいたの？」

「ずっとつて訳じゃない。現に、今はおまえらがいるだろうが？」

「……お父さんやお母さんは？」

「親父は時々会いにくる」

「お母さんは？」

「うるさい。俺は本を読んでるんだ。静かにしろ」

ヒースは眉間にしわを寄せる。

「ごめんなさい……」

ディモルフオセカは俯いたと同時に、自分の服から立ち上る臭いに顔を顰めた。布を引っ張り上げて臭いを嗅いでみる。クラクラするくらい臭い。ディモルフオセカの仕草にヒースが失笑する。

「ここにはシャワーがないんだ。今日はシャワーのあるところまで行けない。その古い服を出せよ、新しいものと替えてやる。体は拭くくらいしかできないな」

部屋の隅の暗がりですてを拭く。ヒースはその間に汚れた服をどこかに持っていき、代わりに新しい服を用意してくれた。

「ありがとう。ごめんね。こんな新しい服……良かったの？」

ヒースが持つてきてくれた服は真新しく、地下都市流行の服ら

しく、今まで着ていたものとは随分デザインが違っていた。
「良かったも何も……普通だろ？ こんなの……」
ヒースは不思議そうに首を傾げた。

* * *

次の日目覚めると、デイモルフオセカの足には細い紐が結ばれていて逃げられないようにつながれていた。

「これ何？」

デイモルフオセカは茫然と紐を持ち上げる。

「紐だ」

ヒースは、読んでいた本からちらりと目線を上げてデイモルフオセカを見ると鼻で笑った。

「そんなの、見れば分かるよ。なんで私の足に紐が結ばれてるのかって訊いてるんだけど……」

「この部屋の中でなら自由に動き回れるように調節してある。問題はないだろう？」

デイモルフオセカはあつげにとられてヒースを見る。ふと気づくとカメラリアの姿がない。

「カメラリアは？」

「あいつなら、出て行った。馬鹿なやつだ。もう元の生活になんて戻れやしないのに」

元の生活……デイモルフオセカは小さな溜息をついた。

「ねえ、ヒース、私、話しておかなければならないことがあるんだけど……」

デイモルフオセカはぽつりぽつりと言葉を選ぶように話し始める。ヒースは顔をあげてデイモルフオセカを見つめた。

「昨日話していた、森の民の話んだけど、実は、私ね……」

深刻な顔をして、視線を泳がせるデイモルフオセカをヒースが遮った。

「そんな話、どうでもいいじゃないか。もうちょっとこっちに来いよ。そっちは暗いだろ？」

ヒースが近寄って来たので、デイモルフオセカは咄嗟に身を引いた。ヒースはぴくりと体を強ばらせる。

「そ、そうだ、この部屋、もっと明るくしようか？ 外に行けば光苔がたくさんあるんだ。とって来る」

ヒースは少し慌てた様子でドアの外に出た。

「よう、ヒース。お前がこんな時間に部屋から出てくるとは珍しいな」

「！」

しまった、まだ男たちが部屋に残っている時間だった。

そう気付いて引き返そうとしたヒースは、あっという間に男たちに囲まれてしまった。

「あの部屋にいなきゃ、あの妖しい術は使えない。そうなんだから？ リーダー格らしい男がにやにや笑いながらヒースに近づいてくる。」

「勘違いもいところだ。どこにしようが問題はない」

ヒースは言ったが、その声は明らかに上ずって震えていた。

「そうかな？」

男はズいっと近寄ってヒースの顎をつかんで上向かせる。

「昨日捕まえた女を逃がしたようだが、逃がしていいと誰が言った？」

「逃がしたんじゃない。勝手に逃げたんだ」

「逃げないようにできたはずだろ？ その証拠にもう一人のやつは逃げないようになっているか？」

「……」

「おまえ独り占めしようなんて考えてるんじゃないだろうな」

男は凄んだ。

隣の部屋からヒースのどなり声が聞こえた。デイモルフオセカは驚いてドアに駆け寄る。隣の部屋でヒースが男たちに囲まれて羽交いじめにされたまま殴られていた。

「ヒース？」

デイモルフオセカは瞠目する。

「俺の部屋に勝手に入るなっ」

ヒースの制止にも関わらず、男たちはニヤニヤしながら奥の部屋にズカズカト入り込んできて、デイモルフオセカの腕を掴んだ。

「！」

抵抗するデイモルフオセカはあっさりと拘束され、床の上に乱暴に押し倒された。両腕を押さえつけられ、もう一人がデイモルフオセカに馬乗りになる。

「おまえは、そこで指でもくわえて見てな」

男たちはヒースを散々殴った後、両手両足を縛りあげて床に転がした。

胸の辺りの布をビリリと破かれたその瞬間、デイモルフオセカの目の前が真っ白になった。気を失った訳ではない、実際に辺りが真っ白な光に包まれたのだ。

それまで、紐だと思っていた足の拘束がシュルリと解け、空を切っつてしなやかな鞭のように男たちに襲いかかった。男たちがかわした紐の鞭が部屋の壁に当たり、轟音とともに壁に亀裂が走る。

「うわっ、なんだこりゃ！」

男たちは蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

「おまえ……森の民なのか？」

再び静寂が戻った部屋の中、蒼白になったヒースがデイモルフオセカを見つめる。

「わ、私……説明しようとしたんだよ？」

デイモルフオセカは、上ずった声でヒースに話しかける。

「出てけ、出て行けよ。感染するだろう！俺は森の民なんかじゃない！おまえのが感染っただけなんだ。そうだ、おまえがうつしたんだ。すぐに治る。だって、俺は森の民なんかじゃないんだから！」
ヒースはまくしたてた。

やがて完璧な沈黙が部屋を支配した。デイモルフオセカは服の乱れを整えると、ヒースに微笑んだ。

「ヒース、さよなら。元気で……」

デイモルフオセカは俯くと部屋を後にした。
鞭になっていた木の根がゆらゆら揺れる。

さよなら、デイモルフオセカ。

その木がそう囁いたのを、デイモルフオセカは確かに聞き取っていた。

あの木は、もう随分前からあそこにおいて、ヒースに寄り添ってきたのだ。ヒースに疎まれても、利用されるだけだとしても……保護者として……。

森の民の居住区、地上にあるアール・ダー村から逃げ出して地下都市ハデスに来たデイモルフオセカは、自分が地下都市のことを何一つ知らないのだという現実に打ちのめされていた。森の民が忌み嫌われている現状も、その理由さえ、彼女は知らなかった。

第七話

惑星ハルには文明が存在する。

文明を築いたのは人類。現存する種族は『一般人』と『森の民』と『ファームの民』の三種だ。一般人とファームの民は地下都市ハデスで暮らし、森の民だけが、地上の森アール・ダー村で暮らしている。

一般人は強大な科学技術力を発展させ文明の保持に力を注ぎ、ファームの民は自らの体に葉緑体を持ち光合成を行うことができる。そして、森の民は植物を操る能力を持ち、その力を行使することで文明を支えてきた。

森の民は、そのほとんどが森の民の親から生まれるが、ごく稀に一般人から生まれることがある。能力が発覚すれば、政府により捕獲され、管理され、利用される。

育児に関して、一般人の親の心配事は主に三つ、病気、学校の成績、そして、森の民の力を発症すること、と言われている所^{ゆえん}だ。

* * *

目を覚ますと、デイモルフオセカは誰かの腕に抱きかかえられて毛布に包まっていた。バスローブの布を通して伝わってくるその人の体温が温かく心地よい。しかし、その人の顔を見てデイモルフオセカは驚愕した。さっきのあの赤目男だ！ デイモルフオセカはもがいて逃げようと試みる。

「……ん」

男が身じろぎをした。

デイモルフオセカは、はっとして動作をやめると、男の顔を覗き込む。男は疲れているように見えた。青白く、眉間に寄った皺が苦悩しているように見える。

「痛っ」

デイモルフオセカは目のあたりを押さえる。痛い。さつき逃げ込んだ下水道で男に殴られたのを思い出した。

この人が助けてくれたの？

デイモルフオセカは考え込む。少なくとも、この人は事情を聞くうとしてくれたのだ。それがどれ程感謝すべきことなのか、デイモルフオセカは、ようやく気づいた。

「僕はカナメ・P・グラブラという」

「グラブラさん……あの、随分ご迷惑を掛けてしまったみたいで……ごめんなさい。それに……」

デイモルフオセカはおおずと男を見上げる。

「カナメと呼んでくれて構わない」

カナメの言葉にデイモルフオセカは小さく頷いた。

「それに、あの……助けていただいたみたいで……ありがとうございました」

「礼には及ばない。君を保護していた僕には、君の安全を確保する責任があった」

「はあ」

安全を確保する責任……かあ。ずいぶん硬い職業の人なんだろうとデイモルフオセカは検討をつける。

「それで、さっきの続きだが、君の事情を説明してもらいたいんだけどね」

デイモルフオセカは視線を落したまま、観念したように話し始めた。

「簡単に言うと……規則を破って逃亡中です。あの……私は……通報されるんでしょうね？」

デイルフォセカは頼りなげにカナメに視線を合わせる。どうせ通報されるならば、ここで事情を話すことに意味はない。

「公安に通報するかどうかは君次第だ。僕には事情を聴くだけの権利があると思うよ。しかし君が本当のことを話してくれないのなら、今からすぐにも公安に連絡する。僕には君を匿う理由はないし、メリットもないからね。ただ君が、僕の植物を助けてくれたみたいだから、少しばかりお礼をしてもいいとは思っている」

「植物？　もしかして、アレオーレのこと？」

言ってから、デイルフォセカははつと息を呑んだ。

もしかして、森の民だつてこともばれている？　状況はどんどん悪くなっているようだ。

そういえば、この人は感染することが気にならないのだろうか？

森の民の力は感染すると思われていて、地下都市では嫌われているらしいことを、デイルフォセカは知ったばかりだ。しかしカナメは、デイルフォセカが森の民であることには特に気にする様子もなく続けた。

「アレオーレ？　こいつそういう種類の植物なの？　それとも個体の名前？」

カナメは胡散臭そうに、アレオーレがパタパタと部屋の中を飛び回っているのを目で追う。

アレオーレは固体の名前だ。種類はカクタス。

カナメの部屋に忍び込んだ時、デイルフォセカは枯れかけていたアレオーレを見つけた。助けるつもりで力を使ったら使い過ぎたのだ。疲労していて力のコントロールがきかなかった。否、コントロールすることが元々苦手なのだ。結果、アレオーレは植物でありながら自分で移動できるようになり、しかし逆に力を使い果たしたデイルフォセカは昏倒したのだった。そして、そのアレオーレは、デイルフォセカが意識を失う直前に見た時とも形態が異なっていた。羽などなかったはずだ。もしかして、意識がないうちに力を使ってしまった？　この人はそれを見たの？

「ずいぶん昔に友人からもらった植物なんだけど、何年も経つうちに元気がなくなっていてね。何をしてもダメだった。枯れそうになつていたんだ。そこで特別樹脂を作ってもらって、できるだけ枯れないように封印をした」

カナメは一呼吸おき、デイモルフオセカの反応を見る。俯いて、つま先を見ていたデイモルフオセカの視線が揺れている。

「……アレオーレはアール・ダー村でもらったんだ」

カナメは試すように、様子を窺うように言葉を紡いだ。カナメの言葉にデイモルフオセカははっと顔を上げる。

「アール・ダー村に行ったことがあるの？」

デイモルフオセカの中で警戒と信頼がせめぎ合う。

「ずっと昔にね。僕の友達アール・ダー村に住んでいた森の民だった」

カナメは探るようにデイモルフオセカを見つめた。

「私は……私も森の民なの。アール・ダー村から……逃げて来たの。デイモルフオセカはためらいながら小さく呟いた。カナメは小さく溜息をつく。

やっぱりそうかという落胆と、イブキの案に乗るためには、かなり規則違反をしなければならぬという途方に暮れた思いと、しばらくこの子をここに置かなければならぬことへの暗澹とした思いが、ないまぜになった為だった。

できるだけ穏便に、しかも素早く行う方がいいだろう。かわいそうだが、少し従順になつてもらう必要があるそうだ。

カナメは目を細めると、威圧的に響くように声を低めた。

「君はさつき規則を破って逃げていると言ったよね」

カナメの問いにデイモルフオセカは小さく頷く。

「なんとという規則違反だが、君はわかっている？」

デイモルフオセカが戸惑ったように首を振る。

「では、教えてあげよう。ハル連邦憲法第三章第四十一条、国民としての任務を遂行する義務の放棄。もしくは、刑法第二百四十七条

忒項、任務違背行為にあたる。しかも、森の民の居住地は厳しく政府によって決められている。正当な手続きなしに地下都市に侵入することは国家反逆罪だと言われても反論できない。最悪の場合、分解処理になる可能性も否定できない」

デイモルフオセカは息をのむ。国家反逆罪……分解処理……。なんて重く、恐ろしいその言葉の響き。この人は裁判官か、もしかしたら公安の人なのかもしれない。デイモルフオセカは既に捕獲された気分で見舞われたが、カナメの容赦ない言葉は続いた。

「君、ご両親はいるの？ 未成年だよ。監督不行き届きということ、さて、どこまで責任をとらされるだろうね。いくら森の民だろうと容赦されないと思うが……」

カナメの威圧的な口調に、デイモルフオセカは驚愕して顔を上げた。

「！」

パパとママにまで罰が及ぶ？

たぶんこうだろうと自分で考えていることと、他人からそうだとされることには雲泥の差がある。デイモルフオセカは自分の置かれている状況が思っていた以上に悪いことに愕然とする。

分解処理……。地下都市では罪人を罰する為に行われると噂で聞いていたことはあったけど……。

自分だけならまだいい、でも、両親を巻き込むかもしれないことをデイモルフオセカは失念していた。周りを顧みなかった自分の軽率さに呆然とする。どうしたらいい？ 体がかくかくと震えて来る。「で、何をやった？」

カナメの質問の意味が分からずに、怯えたデイモルフオセカの瞳がカナメを注視する。

「殺し？ 盗み？ 何かやったから地下都市に逃げてきたんだらう？」

「……何もしてないっ」

声が震える。

「じゃあ、何のためにこんなところまで来た？ 森の民の住居法を知らなかった訳じゃないだろ？ 犯罪になることがわかってそれを犯すということは、それ以上の罪を犯したとしか考えられないんだけどな」

「本当に何もしてない。ただ……逃げただけだもん……」

「何があつた？」

何か事件にでも巻き込まれたかとカナメは思いつく。

「……嫌だつたの……私は、誰にも悲しんで欲しくなくて……」

カナメは無言のまま、話の続きを待つ。

「……ねえ、どうして森の民はアール・ダー村から出てはいけなの？ なのに、どうして死んだら地下都市に送られるの？ どうして……私たちには選択の余地がないの？ わからない、わからないよ。私達は政府の操り人形じゃないよ？」

疑問だらけなのだ。納得ができなかったから、前に進めない。前に進む為にアール・ダーを逃げ出した。

「……結婚しなさいって政府から命令が来たの。でも相手の人には恋人が居たんだよ？ 私たち『森の民』には愛し合う人を決める権利さえないの？」

流れる涙さえぬぐおうともせずにデイモルフオセカは続けた。

「ハル政府にとって森の民って何？ 有益な植物を作り出す為だけの道具？」

自分だけの都合で逃げたつもりはなかった。だけど、自分以外の誰かに迷惑がかかるかもしれないことを慮おもれなかった。

カナメは眉間にしわを寄せる。

ハル政府のやり方が強引なのは百も承知だ。それは、一般人に対してもファームの民に対しても同様の事。ハル政府が強権を発動するのは、きちんとした訳がある。しかし……森の民はその理由を知らない。森の民たちは、母なる惑星ハルが危機的状况にあることを知らされていなかった。

「カナメ、私の子どもたち、森の民のことをお願いね。きっと、たくさん辛い思いをするわ。力を持っている為に、私みたいに辛い思いをする。だから力を貸してあげて……お願いよ」

かつてアール・ダー村で、アイリスはそう言った。

アイリス、君の心配が、こんなに時間を隔てた今現実になっているよ。

そして胸の内で静かに決心する。

何かやらかしているのならば、イブキの案に乗ってもいいかと思っていたが……この子はダメだ。イブキには悪いが、なるべく速やかにアール・ダーへ帰した方がいい。

カナメは小さく息を吸うと、俯いてぼたぼた涙を落としている森の民に対峙する。

「そうやって規則を破って地下都市にきたところで、そんな疑問に答えがもらえると、君は本気で考えているのか？ そんな子供じみた考えで、こんな所まで来るなど分別がなさすぎだと思わないか？

君はご両親がどれほど心配するか考えられなかったのか？」

カナメは眉間に皺を寄せてデイモルフオセカを睨みつける。

「……君は法を破ったんだ。公安に掴まれば、当然無事では済まされない。無事に家に戻りたいのならば、大人しく言うことを聞くことだ。さもなければ、即刻公安に引き渡す。その場合は両親ともども刑罰は免れないだろう」

シンと底冷えのする眼でカナメは突き放すように言った。

デイモルフオセカはゴクリと唾を呑みこむ。

やっぱりもう一度、逃げなきゃ……。だって、私はもう家には帰れない。だけど、パパやママを巻き込む訳にもいかない。そんなことになるくらいなら、どこか人知れず、下水道でも死んでしまった方がまだましだ。

デイモルフオセカはめまぐるしく考えを巡らせた。

答えを求めて泳いでいた視線が定まってくる。どうするか答えが

出たらしい。カナメはデイモルフオセカの瞳を見つめながら確信する。心の中の決断が瞳に反映されてくる。

その強い双眸にカナメは見覚えがあった。デイモルフオセカの瞳は深い翠色で、その人とは違うけれど、決断をした時の、あの潔い瞳。目を離せなくなる。

アイリス、君にそっくりな森の民だ。大丈夫、きつと無事に返すから。可哀そうだけど、下手な考えの芽は摘み取らせてもらうよ。君のようにはしない。

つい緩んでしまいそうになる顔を引き締めて、その瞳の光が失われることを知りながら、カナメは、その決意を挫く言葉を突きつけるべく口を開いた。

「君、自分だけが、どこかでひっそり死のうなんて考えていないか？」

カナメは冷たく一瞥する。自分の言葉に動揺した様子を見て、カナメは自分の危惧している考えが彼女の中で進行していたことを確認する。

彼女の考えていることをさせるつもりも、公安に知らせるつもりもカナメにはない。

「君は、僕が君の名前を知っていることを覚えている？」

どこか不穏な言い方に、デイモルフオセカは戦慄して紅い瞳を見つめた。

「それがどういうことだか分かるか？」

公安に捕まるよりも更に悪い事態に自分は陥っているのではないか、小さく震えながらデイモルフオセカはその瞳を凝視する。カナメは効果的に響くように、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「君が死のうが生きようが、君のご両親の処分は僕次第だということだ」

デイモルフオセカは一瞬目を見開いて呼吸を止めてから、目を閉じた。

なんてこと……私はこの人に本当の名前を言ってしまったのだっ

た。

「分解処理のやり方が二つあるのは知ってるか？ 一つは普通に分解する方法、もう一つは刑罰として分解する方法だ」

カナメの静かな、しかし心を竦ませる底冷えのする声と紅い瞳に絡めとられたように動けない。

「大の大人が泣き叫ぶくらい苦痛らしいよ。意識があるままで、じわじわと肉や骨が分解されていくんだ。ご両親をそんな恐ろしい目に、遭わせたくないよね？」

「パパもママも関係ないの。私が……私が勝手に……」

デイモルフオセカは無意識のうちに右手で神経質に左の掌をゴシゴシと擦っていた。過去の記憶がフラッシュバックする。

「カメラリア！ 手を、手を伸ばしてっ、早く！」

地上へ続く緊急脱出用の梯はしに掴まって、デイモルフオセカは、切羽詰まった声で手を伸ばした。

何か来る。それが分かったのは光苔から伝わってきた動揺だった。「嫌よ、触らないでっ！ 森の民なんかに触られたくないわ」

当然、カメラリアは光苔の動揺に気づかない。森の民であるデイモルフオセカを嫌って、手を取らなかつた瞬間、彼女の命が尽きた。

ヒースの住処すまかを出た後、しばらくしてカメラリアと合流した。カメラリアには、自分が森の民であることをすぐに話した。元々嫌われていることが分かっていてし、距離を置きたいのなら、それで構わなかった。ただ、嫌われている理由を知りたいと思つたのだ。でも、カメラリアは感染るから嫌なのだとしか言わなかった。

もしかしたら、彼女はその本当の理由を知らないのかもしれないかもしれなかった。子供が貧しい家の子を苛めるように、容貌の変わった子を仲間外れにするように、ただ意味もなく嫌うさまに、彼女の態度は似ていた。森の民の力が感染つたからと言って、何に困るのか、デイモルフオセカにはまだ理解することができていなかった。

轟音をたてて流れて来たどす黒い濁流に吞まれて、カメラリアの体は一瞬にして消失した。最終的には、危険を察知して伸ばしたカメラリアの手をデイモルフオセカの左手が掴んだはずなのだ。しかし気づいた時には、本体をなくした肘から先だけの手をデイモルフオセカは握りしめていた。

デイモルフオセカは悲鳴をあげて、反射的にその残った手を振り落とし、結果、その手も溶解した。

自分が森の民だと言わなければ良かった……。

そうすればカメラリアはデイモルフオセカの手をとったはずだった。

もつと早く光苔の様子に気づいていれば良かった……。

下水道の壁面の上部にしか光苔が生えていなかった、その理由に、もつと早く気づくべきだったのだ。

聞かれるままに、自分の名前を答えなければ良かった。

自分の迂闊さを責める声だけが頭の中で木霊する。鼓動が速くなつて呼吸が荒くなる。

しかし、カナメは容赦なく続けた。

「僕はいつでも、君と君のご両親を通報することができる。だから君は僕の言うことを聞かなければならない。分かるよね」

親を人質に取るような姑息なことはしたくはなかったが、彼女に下手なことをされれば、取り返しがつかなくなる。たとえアイリスとの約束がなかったとしても、ハルにとって貴重な人材である森の民を死なせる訳にはいかない。カナメの狙いは、デイモルフオセカに、抵抗することなくアール・ダーへ帰る気になつてもらふことだ。事を無事に運ぶ為には、カナメの指示に従順になつてもらわなければ困る。カナメにだってリスクが発生するからだ。

カナメの言い含めるような淡々とした声には有無を言わさぬ圧力があつた。デイモルフオセカはゴクリと唾を飲み込む。デイモルフオセカの脳内に警告ランプが点滅する。

「おいおい、こんな子供相手になに脅しかけてるんだよ」

急にドアが開いて、イブキが呆れたような顔で入ってきた。

「イブキ？ また来たのか。なんで、イブキが僕の部屋に勝手に入ってくるんだよ。それにノックくらいしろよな」

カナメの瞳から急速に力が抜ける。

「コブから鍵を借りたんだ。あいつには合鍵渡しといて、俺にはくれないのか？」

「コブは勝手に合鍵を持って行つたんだ。心配だからって」

カナメは渋面で返す。

「俺も合鍵作つところ。心配だから」

イブキが片眉をあげてニヤリと笑つて見せた時、背後でドサリと倒れる音がした。驚いて振り返つたカナメが見たのは、デイモルフオセカが左腕を抱え込んだまま床に倒れたところだった。

「おい、やり過ぎだろ。孫くらいも歳が離れてるんだぜ？ 手加減しても知らないのかお前は」

イブキが顔を顰める。

「孫どころじゃないだろ、それ以上の歳の差だ」

カナメはデイモルフオセカを抱き上げてソファに横たわせると、蒼白になって目を閉じている顔を覗きこむ。

確かにちよつとやり過ぎたらしい。一度逃げ出されて、警戒し過ぎてしまったようだ。カナメは大きな溜息をついた。

第八話

最初に極冠の氷が解けた。解けた氷は、さして大きくはない惑星ハルの大陸をじわじわと飲み込んだ。僅かな高地を残して、ハルは一旦、青い水球となった。

逃げ惑った人々は、わずかに残った高台の陸地を拠点として地下都市を形成し、細々と生き延びた。次いで大地は干上がり、惑星ハルは完全に生物を拒絶する不毛の大地となった。

ジタン末期の大災害である。

人類を含め生物が生きていけたのは地下都市と、高地でシールドを施すことのできた三つの地上、それがハルに残された最後の地上のオアシスだった。

三つの地上のうち、一つは人を寄せ付けぬジャングルで、一つは五年前に流星群に直撃されて壊滅した。そして最後の一つ、ハルの地上の森『アール・ダー村』、ここに森の民は住んでいた。

森の民の数は僅かに三千、植物を操る不思議な能力を持っていて、ハルの最後の地上を守りながら暮らしている。大半の者は体が弱く、寿命も短い。日増しに苛烈さを増すジタンに、その力を使いながら植物とともに生きている種族だ。その特殊な能力の故に政府からは手厚く保護されている。エリアEの植物は地下の寂光の下でも光合成ができ、大量の酸素を地下都市全域に提供できるように改良されていたが、それらはすべて森の民によって改良された植物群だった。

不思議なことに、森の民の力の源は未だに解明されておらず、森の民を分解再生すると、その力が失われてしまうことが確認されて

いる。地上と地下都市は隔絶している。一般市民が地上で暮らすことはなかったし、森の民が地下都市で暮らすことは、一部の例外を除いて、なかった。それがハル連邦政府の方針だった。

「イブキ、この子はアール・ダーに返そう。こいつは単なる家出娘だ。こんなことに巻き込むべきじゃない」

ソファに横たえたデイモルフオセカを心配そうに覗きこんでいたカナメは、立ち上がってイブキに向かい合う。

「こいつが帰りたいと言ったのか？」

「いや、そう言う訳じゃないけど……」

「だったら、この子に決めさせよう。おまえが決めることでもないだろ？」

「しかし……」

「お、目を覚ましたぞ」

イブキがデイモルフオセカを覗きこむ。カナメは不機嫌そうにマグカップの飲み物を啜った。

デイモルフオセカはソファの上で目を覚ました。明るいキャメル色の髪と薄い褐色の瞳をした男が覗き込んでいる。精悍な顔立ちで、デイモルフオセカの結婚相手だったシーカスに少し雰囲気似ていると、デイモルフオセカは震えながらそう思う。震えていたのは、その男が怖かったからでも、寒かったからでもない。手の感触が……デイモルフオセカの手を掴んだカメリアの手の感触が、あまりにも生々しく蘇えていたからだ。

救えなかった命…… たった今そこにあつた命、でももう取り返しのつかない命。涙が次から次へと零れ落ちる。

「おい、大丈夫か？」

「手が……」

デイルフォセカは小刻みに震えていた。

「手がどうかしたか？」

抱え込むようにしている左手を拳にしたまま小刻みに震えている。拳はガチガチに強張っていて、デイルフォセカ本人でさえ解くことができないようだった。イブキは左手の指を一本ずつ解いていきながら、掌を確認する。

「手だけが残ったの……」

「なんだって？」

「あとは全部溶けてしまった。……カメラリア。私のせいだ。私の……」

デイルフォセカは焦点の定まらない瞳から涙をこぼす。

「おい、落ち着け。ここまで来る間にあつたことか？」

下水道では、時々清掃と称して溶解液を流すという噂を聞いたことがある。目的は沈殿した汚物の除去ということらしいが、その中に犯罪者やドロップアウトした人間が逃げ込んでいることを、政府が知らない訳がなかった。ハレス地下都市市長ルドのやりそうな荒っぽいやり方だ。

イブキの大きな掌がデイルフォセカの頭をふわりと包んだ。デイルフォセカの瞳がようやくイブキの顔に焦点を合わせる。

「忘れる。どうにもならないことをいつまでも覚えていたって仕方がない。だから……忘れるんだ」

デイルフォセカはイブキを見上げて逡巡する。

忘れない、でも忘れてはいけない。二つの気持ちが天秤の上でどっちかずつ揺れている時、そんな不安なつらい状態を、たとえば間違いであったとしても、収めてくれる他人の意見はありがたいことだ。気弱くなっていたなら尚更だ。デイルフォセカはその意見に縋りつきそうになって、しかし、思いとどまった。

本当に、それでいいの？

心のどこか深いところで声がする。

「そんなことを簡単に忘れられるなら、もっと楽に生きてるだろ。こんなに面倒くさい生き方をしているこいつが、そうそう簡単に忘れられるもんか」

まるで、デイモルフオセカの心の声に応えるかのように、紅い瞳のその人は、間髪いれずにそう言った。

その言葉は、不思議なくらいストーンとデイモルフオセカの心に収まる。

忌まわしい記憶を、今封印して忘れて楽になったとしても、体に入り込んだ異物のように、それはいつしかじわじわと拒絶反応を起こし、心を蝕むに違いなかった。心の中できちんと消化し、吸収し、血肉にして初めて自分のものにすることができる。カメリアに起こった出来事も、彼女の思いも、その存在も、無かったことになんてできる訳がないんだから……。

この人はそれを知っているんだ。

敵なのか、味方なのか、親切なのか、辛辣なのか。

ダイニングで何か作り始めたカナメの背中を、デイモルフオセカは複雑な思いで見つめる。

考え込んでいるデイモルフオセカの目の前に、突然大振りのマグカップが差し出された。見上げると、カナメが温かな湯気のががった飲み物のカップを手渡した。

「この暑いのに熱い茶かよ」

イブキの呆れた声が降ってくる。

「ハーブティーだよ。気分を落ち着けたい時ってメニューに書いて

てあつた」

「俺には冷たいのくれ。ハッピーな気分になるやつな」

「了解」と言いながらカナメは再びダイニングへ消えていった。

そっか、私以外の人は暑いんだ。デイモルフオセカは渡されたマグカップを冷えた指先で包みこむ。カップの温かさが手に心地よかつた。

「お前なんていう名前だ？」

イブキが話しかけてくる。

「……デイモルフオセカ」

カナメには本名を言ってしまったのだ。今更偽名を使うことには何の意味もない。デイモルフオセカは沈んだ声で答える。

「デイモルフオセカ、これだけは説明しておかなければならない。

俺達は君とは他人同士だ。親兄弟ではない、もちろん配偶者でもない。血のつながりもなければ、法で定められた関係もない。冷たいようだが、俺たちには君を匿う理由も義理もない。匿ったのがバレれば俺達だつてヤバイことになる。しかし俺達は君を公安には突き出さなかつた。それは、俺達に計画があるからだ」

「イブキ、その話はまた今度にしないか？」

カナメが割って入る。

「カナメ、地下都市で過ごす時間が長くなればなるだけ、この子は危険な状態になる。俺は一刻も早く計画を進めて、この子の安全を確保したいと思う。それがこの子の為だとも思っている」

「……」

イブキの言葉にカナメは黙りこむ。そんなカナメを一瞥して、イブキは続けた。

「その計画には君の協力が必要だ。俺達の計画に協力してくれるな

ら、公安には突き出さない。身の安全を保障しよう。必要ならば助力も惜しまない。我々はある程度ならば、君に便宜を図ってやれる立場にある。そこで、だ。俺達と一緒に事に当たる際に必要なことはなんだと思う？」

イブキは器用に片眉をあげて見せる。デイモルフオセカは力なく肩を竦めて首を左右に振る。

「信頼だ。俺達は君に嘘はつかない。君も嘘をつくな」

「僕は嘘をつかないなんて言っていないよ」

カナメがイブキに飲み物を渡しながら文句を言う。

「そっか？……よし、じゃあ、この人は嘘をつくかもしれない。俺はつかない。そういうことだ」

イブキは肩を竦める。

「何を……すればいいの？」

デイモルフオセカは不安そうに顔を上げた。

人は嘘をつかないで生きていくことができるだろうか。

デイモルフオセカの不安そうな顔を見ながらカナメは考える。人間社会において、嘘は必要悪だ。ならば、嘘をつかないと言った時点で人は嘘を言ったことになる。この子はそんなことさえ考えつかないのだろう。それほど彼女は若く、経験が乏しいのだ。カナメは小さく溜息をつく。

「君を分解再生させてほしいんだ」

イブキはどこまでも単刀直入だった。デイモルフオセカの目が見開かれる。

「イブキ、それは……」

そんなことを知らせれば、彼女はアール・ダーに帰れなくなってしまう。地下都市の無修正情報を知った森の民は、もうアール・ダーでは暮らせない。再び口を挟みかけるカナメを、イブキは片手で制した。

「確かにシヨツクな話だと思う。でも内容を知らないまま何でも協力しろなんて、俺は言うつもりはない。しかし、これは、森の民の為でもあるんだ」

イブキは続けた。

「森の民の力は謎だらけだ。その力が何に由来しているのかさえ解明されていない。これはかなりレベルの高い機密なんだが、現在、政府は森の民の分解再生に成功していない」

「やめろ！ イブキっ。そんな事を森の民に容易く話すなっ……」

イブキはこの子をアール・ダーに返さないつもりなのか？

「分かっているさ、カナメ。それ以上言うつもりは無い。おまえが森の民を庇う気持ちも分かっているつもりだ。だけど、森の民に関しては、お手上げ状態なのも事実だ。分かっているだろう？」

にらみ合う二人を呆然と見上げて、デイモルフオセカは口を開いた。

「あの……人を分解再生することができるの？」

「ああ、できる」

イブキの言葉にデイモルフオセカはゴクリと唾を飲み込んだ。

デイモルフオセカの姉、アリッサムが亡くなったのは初等部の事だ。姉の亡骸は、泣いてすぎる両親の手からもぎ取られるように地下都市へと送られた。

森の民の亡骸が地下都市に送られるその理由。死者さえも蘇らせられるという地下都市の科学技術の話。

本当だったんだ。でも、森の民は分解再生されないうって……それって……。

デイモルフオセカは頂垂れる。

カナメとイブキは、これまでに数え切れないほどの森の民の遺体

を分解再生した。結果は大きく二つに分かれた。普通の何の能力も持たない一般人として再生するものと、能力を持って再生するもの。しかし、能力を持って再生したものは、まるで壊れたぜんまい仕掛けのおもちゃのように、僅かの時間で能力を放出し尽くし、息絶えた。

分解ミスか、再生ミスか、あるいはこれは遺伝子に刻まれた能力ではないのか。カナメとイブキは原因究明に明け暮れた。生きている森の民を研究するべきだ。二人は政府に何度も掛け合ったが果たされなかった。森の民は嚴重に保護されている。特別保護種なのだ。生体だろうが死体だろうが、遺伝子に変わりはない。遺伝子でなければなんなのだと突っぱねられた。

「人類のうち、森の民だけが再生されないと……そう言うことなの？」

「残念ながら……」

イブキは森の民の一部が再生されないのだとは訂正しない。能力を持たない森の民など、政府にとって何の価値もないからだ。

地下都市にすれば、もしかしたら姉に逢えるかもしれないという
幽かな希望。

なんと甘く、浅はかな期待だったのだろう……。

デイモルフオセカは大きく息を吐き出すと、顔を両手で覆った。

「……僕は森の民の研究をしていてね、情報を集めたいんだ。森の民はアール・ダー村で保護されていて、滅多にお目にかかれないから、君からの様々な情報は貴重なデータになると思う。それに、情報収集時に分解再生の問題点が発見されれば良い訳で、特に、どうしても君を分解再生しなければならぬという訳ではないんだ」
見かねたようにカナメが静かに補足する。

頭を抱えたまま考え込んでいたデイモルフオセカの耳に、カナメの声が染み込むように入り込んでくる。さっきとは全然違う労わった様子の声。

この人は、私を安心させようとしているの？ ううん、そんなはずない。この人は人の心を操る為に色々なしゃべり方ができる人なんだ。

デイモルフオセカは警戒心のこもった視線でカナメを見上げる。

「あなたは嘘をつくって言ったわ」

「必要がない時に嘘はつかないよ」

カナメの言葉は穏やかだ。

「……」

しかし今はもう、何も判断できる気がしなかった。

デイモルフオセカは押し黙ったまま頂垂れた。

「とりあえず、今日は無事、意思の疎通も図れたことだし、飯でも食って寝た方が良くないか？ もうこんな時間だ」

意志の疎通が図れたか？ と呆れた声で返すカナメには答えず、イブキはコブからもらった食糧袋をガサゴソと漁り始めた。

* * *

奥の白い小部屋にソファを運び込んでいるカナメを手伝いながら、デイモルフオセカは静かに問いかける。

「ねえ、森の民でなければ、死んでも再生できるんだよね？」

「できるね」

小部屋をデイモルフオセカの寝室にする為にソファを運び込みながら、カナメは返答する。

「再生したい人は、誰でも再生できるの？」

「誰でもは無理だな。再生の為の厳しい条件があるからね。ねえ、君、地下都市のことをあまり知ろうとしない方がいい。次にイブキが来た時には、計画には協力できないと言いなさい。君はアール・ダーに帰るべきなんだ。もし君にその気があるのなら、今からでも明日朝一のガイアエクスプレスを手配するよ」

「……帰れないの。私、帰る場所が……もうないから……」

デイモルフオセカの言葉に、カナメは小さくため息をついた。

第九話

デイモルフオセカはモニターの前で、目を見張っていた。

『流れ落ちるロング・ドレープがあなたを主役に仕立てます』

光沢のある滑らかなシャンパン色の生地、ネグリジェが、モニターに映し出される。

ふええ。こんなの着て寝たらパーティーに行く夢を見たりして……。

次、カチリ。

『妖精のため息でつくった極上の生地で、素敵なお夢の世界へ』

ふんわりして肌触りの良さそうな薄緑色のセパレートパジャマだ。ふうん。これいいかも。次、カチリ。

『寝相が悪くても大丈夫、耳つき・しっぽつき・モコモコ生地、どうやっても可愛くしか見えません』

白い生地のフード付きパジャマにキャメル色の耳としっぽがついている。

へええ、なるほどなるほど……。私、寝相が悪いからなあ。これもいいなあ。次、カチリ。

『主役は素肌、あやうげなラップデザインのパジャマが、あなたを魅惑の夜へといざないます』

てるんとした生地の黒いネグリジェで、巻いてあるタイプなので寝ている間に肌蹴てしまいそうだ。

思わず、デイモルフオセカはモニターに食い入るように見入ってしまう。

魅惑の夜……それって……。

その時、突然背後から声を掛けられてデイモルフオセカは文字通り飛び上がった。

「デイモルフオセカ、君はパジャマを選ぶのに、どれだけ時間をかければ気が済むんだ？」

振り向くとカナメがあきれ顔で佇んでいた。

先ほど、カナメから上着を渡された。もう着ないから、これの代わりに夜着を用意しなさいと言われたのだ。渡された上着はとても上等そうな手触りの良い布で、しっかりした作りのものだ。

まだ着れそうだけど……。これの代わり？ なにそれ。いや、それよりも……。

「これ……もう着ないの？」

デイモルフオセカは不思議そうにカナメを見上げる。

「さすがにそのデザインは、もう着る気になれない」

そう言われてデイモルフオセカは上着を広げてみる。深い緑色の上着には、豪華な刺繍が施されていて、森の民の長老がこんな上着を着ていたと思います。

「これカナメの？」

「そうだけど？」

随分渋い趣味……。だったのかな？ 趣味が変わったってこと？

首を傾げて考え込むデイモルフオセカに、どの夜着にするか自分で決めなさいとカナメは言っ、彼女をモニターの前に連れて行ったのだった。

「あ、あの……ごめんなさい。たくさん種類があるから迷っちゃって……。本当にどれでもいいの？」

背後のカナメに問いかける。

「それにするつもりなのか？」

モニターをチラリと見て肩を竦めるカナメに、デイモルフオセカは火がついたように真っ赤になった。モニターでは、危うげなラップデザインパジャマを来たモデルのお姉さんが誘うようなポーズをとっている。

「き、着ませんよっ、こんななのっ」

慌てたディモルフオセカの指がモニターの画面を上滑りして、考えていたのとは違うパジャマが確定してしまった。

わあっ、こんなの選んじやったし……。でも、これはちよつとなあ。変えられるの……。かな。

しかし、訂正を言い出す間もなく、モニターの横にあつたダストボックスのようなものがパカリと口をあけた。しかも、有無を言わさぬ口調でカナメが指示を出す。

「ほら、早く上着を入れる」

「え？ あ、でも……。あ、いえ……。まあ、いつか。あの、これ？」

手にしていた上着を持ちあげるとカナメが頷くので、慌てて上着を放りこんだ。入れた途端に口がパタンと閉じて、ういーんと稼働する音が聞こえた。まもなくモニターに数値が表示される。確認ボタンを押すと、そこからディモルフオセカの選んだパジャマの横にあつた数値分が差し引かれ、更に隣にあつた蓋つきのボックスの蓋が穏やかに点滅し始めた。カナメが開けるようにそれを指すので開いてみると、中にはディモルフオセカが選んだパジャマが入っていた。

アール・ダー村では、汚れた服は洗う、破れた服は縫う。それが当たり前だった。地下都市では違うらしい。破れた物も汚れた物も気に入らなくなった物でさえ、すべて分解して新しいものに再生するのだ。質量が同じものなら物々交換になるし、質量が少ないものに換えるときには、余った分のポイントがクレジットとして貯まる。逆に分解した物よりも大きいものと換える場合には、ストックしていたクレジットから引き落とされるのだ。

「アール・ダー村にも分解再生装置があるはずだろ？」

出てきたパジャマに呆然とするディモルフオセカに、カナメは怪訝そうに首を傾げる。

「うん、管理棟にあるよ。だけど、こんなことができるなんて知ら

なかった。だってね、その機械に触れるのは長老さんだけなんだよ。新しい服は季節ごとに長老さんがみんなに配ってくれるの。だから、この機械がそんなものだって知らなかった」

「アール・ダーでは運用方法が違うのか……」

アール・ダー村の運営状況を少し確認しておいた方がいいのかもしれない。カナメは考え込む。

次に、デイモルフオセカはシャワールームで呆然とする。
なにこれ……。

シャワールームだと教えられたドアを開けて、中を見て途方に暮れる。

オフホワイトの壁で囲まれた部屋の中に、筒状の半透明の個室があった。筒の中には、いくつかスイッチがあるようだ。

デイモルフオセカは筒の中に入って、しげしげと中の構造を見回す。

どこからお湯が出るんだろ。確か、シャワーを使う時にはソープが必要だったと思うんだけど……それは、どこにあるの？

さっぱり分からなかったので、仕方なくカナメを呼ぶ。

「シャワールームの使い方が分からないだって？ アール・ダーではどうしてたんだ？」

カナメがあきれ顔でシャワールームにやって来た。

「ほとんど水浴びで済ませてたから。わっ、私だけじゃないよ？」

アール・ダーでは大抵の人が、それで済ませちゃうし……」

アール・ダー村には水浴びをする為の泉があった。ダフネの泉という。泉の周りを香りの良い月光樹という香木が取り囲んでいるのだが、その月光樹は特別な性質を持っていて、精油のような成分を根から分泌していた。だから、泉の水には月光樹の良い匂いが移っていて、ソープなど使わなくても、その水を使うだけで体も髪もきれいにすることができた。

「もしかして……ダフネの泉？」

ふと思いついたように問うカナメに、デイモルフオセカは頷く。
「懐かしいな。あの泉、まだあるんだ」

そう言っただけに笑うカナメに、目が釘付けになってしまう。

この人は、こんな笑い方もするんだ……。

「ダフネの泉を知ってるの？」

「ああ、知ってる。アール・ダー村に行ったのは子どもの頃なんだけど、その時にもあったよ」

子どもの頃に行った？ 一般人がアール・ダーにやってくることは滅多にない。たまに視察で来るのだから、必ず大人だ。一般人の子どもが来たなんて話をデイモルフオセカは一度も聞いたことがなかった。

奇妙な違和感。

「このスイッチを押すと全部オートで洗浄してくれる。これが温まるだけの時、で、こっちが……」

スイッチを指差しながら教えてくれているカナメの顔が、やけに近いことにふと気づいて、デイモルフオセカは動揺した。うろたえて後ずさった拍子に、肘が何かのスイッチを押してしまう。軽い警告音になって、筒のドアが閉まってしまった。

「あっ」

二人で瞠目して見つめ合う。

「何か押しちゃった。どうしよう」

カナメは顔を顰めた。

「オートだと、終わるまで十五分はここから出られないな」

「えーっ」

突然足元からブワツと湯気が立ち上る。

「きゃあ！ なにこれ」

「心配ない。ただの蒸気だ」

カナメは面白そうにデイモルフオセカを見下ろす。

ほどよく湿って温まったところに、香りの良いソーブが降り注い

だ。ほどよい硬さのブラシでまんべんなくブラッシングされて、それが終わると上から下から勢いよくお湯が降り注いだ。お湯が降り注いできた瞬間、カナメがディモルフオセカの頭上で両腕を伸ばして、彼女を自らの体で庇ってくれたのだが、大した甲斐なく二人してびしょ濡れになる。

頭上でくつくつと笑う声がして、ディモルフオセカは顔を上げた。カナメのずぶ濡れの髪の毛の先から雫が滴り落ちて、ディモルフオセカの顔をつたう。

「……ごめんなさい」

「随分長いこと生きてるつもりだったけど、服を着たままシャワーを浴びたのは初めてだ」

カナメはそう言って、楽しそうに笑った。

「……私も初めて……」

困って小さく笑うディモルフオセカをカナメは優しげに見下ろす。ふいにカナメの手が、ディモルフオセカの短くなってしまった髪を一筋すくった。

「この髪はどうした？ 森の民の女性は髪を大切にするものだと言っているが……」

ディモルフオセカの髪は、アール・ダーを出た時には腰よりも更に下、足首に届くほど伸びていた。物心ついた時から切ったことがなかったのだ。それを三つ編みにしていた。

「……私……すぐ喉が渴いてて……」

地下都市に来てすぐにディモルフオセカは困窮した。水一杯でさえ手に入れることができなかったのだ。そんな時、優しそうな老婆が声を掛けてきた。

見事な髪の毛だねえ、と。

「それで、たった一杯の水と髪を交換したのか？」

カナメは顔を顰める。

「こんなに短く切られちゃうなんて、思ってな……かった……んだけ……ど……」

笑って言うつもりという言葉は、とぎれとぎれになり、震えて続かなくなり、やがて掠れて消えた。

こんなはずじゃなかった。だけど地下都市に来てから、すべてがこんな調子だったのだ。

「バカだな、君は……」

小さくしゃくりあげるディモルフオセカの髪をやさしく梳きあげながら、カナメはそう言うと、すぐに伸びるさと付け足した。

すべての工程が終わると、開いたドアからカナメは出ていった。

「君はもう一度、今度はちゃんと服を脱いでからシャワーを浴びなさい」と言い残して。

第十話

星ウサギという動物を知っているだろうか。かつて惑星ハルにいた動物だ。今はもう絶滅してしまつて、遺伝子情報でしか残っていない。

白いボディにキャメル色の耳と尾、尾の先が蛍光を発するので星ウサギと呼ばれる。かつて毛皮の美しさと手触りのよさで乱獲された。生態ピラミッドのほぼ底辺に位置する草食獣であるにもかかわらず、繁殖力がそれほど高くない生き物で、まもなく絶滅に追い込まれた。カナメは子どもの頃、その星ウサギを飼っていたことがあった。アール・ダー村でのほんの僅かな間だつたが……。

デイモルフオセカのベッド用にソファを白い小部屋に運びこんだ後、カナメは落ち着かない気持ちで自分の寝室のベッドに寝転んだ。本当ならば、寝室を明け渡すべきなんだろうけど……。一応女の子なんだし……。しかし、今ここを使わせる訳にはいかないしなあ。寝転んだまま、カナメはあれこれ考える。

何故落ち着かないのかは分かっていた。自分の部屋に他人が居ることに慣れていないのだ。カナメはその長い人生の中で、唯一いた配偶者とは、共に過ごした期間があまりにも短かった。

結局寝つけずに、ダイニングで飲み物を作ったり、リビングをうろついたりした挙句、カナメは白い小部屋のドアを小さくノックしてみた。

やはりソファではなく、ベッドをリビングに運んで、そこで寝かせた方が良さだろうと考えたからだ。いくら小柄だからとはいえ、リビングに置いてあつたソファで寝るのは窮屈だろうと思えて

きたのだった。しかし返答はない。ふと、気になったカナメがそつとドアを開けてみると、そこには、星ウサギがソファの上で丸くなつて眠っていた。

キヤメル色の長い耳が折れ曲がって顔を覆っている。

カナメは一瞬瞠目した後、小さく吹きだすと、ソファでぐつつり眠っているらしい星ウサギの耳を持ちあげてみる。そつと顔を覗きこんだカナメは、しかし慌ててその肩をゆすった。

「おい、君、大丈夫なのか？ デイモルフオセカ？」

常夜灯に照らされたデイモルフオセカの顔色はひどく青白く、ぐつたりして見えた。苦しげに閉じられた瞼、小刻みに震える体。夜着から出ている小さな手は、氷水につけていたのではないかと疑うほど冷たい。

「……っ」

幽かに身じろぎしてデイモルフオセカが目を開けた。

「どうした？ 具合が悪いのか？」

「……寒い」

この部屋だけは空調を切つてある。地熱で暑いくらいなのだ。カナメはデイモルフオセカの額に手を当てる。指先ほどではないが冷えきっている。カナメは医療用キットを取り出すと、体温や血圧を測る。

すべてが低い。否、低すぎる。

「君、元々、こんなに体温が低い人？」

デイモルフオセカは小さく首を振ると、消え入るような声で、今まで体温が低いなどと言われたことは無いと言った。

カナメはデイモルフオセカを抱きかかえてソファに座ると、自らの手で指先を温める。

「ごめん……なさい。迷惑かけて……ばかりで……」

「いいから眠りなさい。疲れているのかもしれない」

「……地下都市に来てから、眠るのがいつも怖かったんだよ。急に寒くなつて、目を開けてられなくなるの。そのまま死んじゃうような気がして……」

ぐったりと肩に寄りかかるデイモルフオセカの頬を掌で温める。

「怖いよ。私……また、目覚められるかな……」

「大丈夫だ。付いてるから。ちゃんと起こしてあげるから」

カナメの言葉に小さく頷くと、デイモルフオセカは墜落するように眠りこんだ。

森の民が植物に力を使った後、低体温症を起こすことは良く知られている。しかし、デイモルフオセカは力を使った訳じゃない。アレオーレはこの小部屋を嫌って付いてこなかったし、ヒカリゴケだつて家の中には持ちこんでいない。では何故これほどまでに体温が低下してしまうのか。少し調べてみる必要があるそうだ。

まもなくカナメもまた急速な眠気に襲われる。再生したばかりの体と心がインターフェースをとる期間なので、カナメもまた体調が万全ではないのだ。しっかりとデイモルフオセカを抱き抱え直すと、カナメも墜落するように眠りこんだ。

* * *

デイモルフオセカは水の中を歩いていた。

水は冷たく氷のようで、体が動かない。それでなくても水の抵抗で思うように動けないのだ。しかし前に進まなければいけない。それだけが分かっていた。

「ごぼつごぼつと吐きだした息が泡になって上っていく。」

苦しいよう。寒い……。助けて……。誰か……。

目の前が暗くなって、一步も前に進めなくなってしまう。水はいよいよ冷たくなり、重くなり、肺に入ってくる空気は滞っていく。視界が狭まり、そのまま暗く閉ざされていくかに思えた……。その瞬間、まばゆい赤い光が差し込んできた。

ああ……。温かい。

デイモルフオセカは、その光の源がジタンだとすぐに気づく。

こんな深い水の底にまで、ジタンの光が……。

暖かく包み込まれるような日差しの中で、デイモルフオセカはほつと息をつく。しかし、次の瞬間、現実を思い出して呻いた。

私、アール・ダーには戻っちゃいけないかったんじゃなかった？

デイモルフオセカを見て困惑する人、人、人……。

『デイモルフオセカ、政府の決めたことは絶対なのよ。結婚をやめたいなんて馬鹿なことを言わないで』

ねえ、ママ、どうして私の目を見て言ってくれないの？

『デйм、もしオーランティアカに戻って来たければいつでも戻ってくればいいんだよ。ママが何と言おうが構うもんか。パパが何とかするから……』

パパ？ ママと何があったの？ 喧嘩しないで。何があったのか教えてよ。

『……姉さん、俺と逃げようか？』

ホルト？ みんなどうしちゃったの？ みんな変だよ？ みんな、私に何を隠しているの？

そうだ……。私はアール・ダーに戻ってはいけなかった。みんなに困った顔をさせてしまうから……。私は戻ってはいけなかったのに……。

デイモルフオセカは耳を塞いで蹲った。

カナメは砂漠を歩いていった。

どこもかしこも暑く乾いている。ひどく喉が渴いていた。カナメの周りでたくさんの人々が、やはりカナメと同様に足を引きずりながら歩いている。誰も口を閉ざし苦渋の表情を浮かべている。何度も足を砂にとられ、体が傾ぐ。ジタンの光は益々苛烈さを増していた。

木陰を探すが、見渡す限り砂ばかり。しかし、そうであるのに、カナメは少しずつ自分の体が冷やかになってゆくのを感じていた。足取りも軽く、喉の渴きさえ癒されていく。徐々に軽快になっていくカナメの足取りに、不思議そうな顔で隣の男が声をかけてきた。

『おや？ あなたは何をお持ちですか？』

その男は漆黒の瞳を悪戯っぽく輝かせた。カナメは男の言葉を怪訝な思いで聞き、持っていた荷物に目をやって驚愕する。

「これは……」

隣の男も一緒に覗き込む。

「ハルだ……」

『ハルですね』

カナメが驚いて、男は納得した様子で、同時にその名を口にすると、それは、ひんやりした透明な水を湛えた瑠璃色の球体で、ゆっくりとカナメの手の上で回転していた。

これを持っていたから涼しかったのか。

カナメもゆるゆると納得する。

『いいですな、それ。私に譲ってくれませんか？』

男は密やかに問いかける。

「いや……これはちょっと……」

カナメは口ごもり、思わずハルを男から隠してしまう。

『ははは、そうですね。私があなただでもそう言いますよ。埒もないことを聞いてしまったようだ』

男は破顔すると、着ていた真っ黒なマントを翻した。途端に砂塵が舞い、カナメは目を閉じた。

第十一話

イブキが小型大脳コンタクトに、デイモルフオセカの記憶を採取しようと言い出した。その器械は、カナメとイブキが互いに小型化を競って作っていた試作品だった。

これなら独立してどのシステムにも繋がっていないので、情報が漏れだす心配がない。その作業が終わってからガイアエクスプレスに乗せられるよう手配すると、イブキは言い張った。地下都市某研究所からの要請で、彼女を研究対象として招いたという形をとれないか既に検討を始めているのだと言う。

実際に人を再生する為には、からだ本体の情報だけでなく記憶も採取しておく必要がある。しかし、今までの森の民の分解再生は生体を扱っていなかった為、記憶採取をしていなかった。記憶のあるなしが力の有無につながるとはとても思えないというのが政府の言い分だったが、大脳コンタクトによるストレスが森の民の力を削ぐあるいは消滅させることの方を、政府が恐れているのは明らかだった。森の民と言っても、すべての者が強い力を持っている訳ではない。そんな者はむしろまれで、数人がかりで一つの植物の改良を行う場合がほとんどなのだ。だから森の民は多ければ多いほど良く、一人として損ないたくないというのが政府の本音だった。

もしデイモルフオセカが、目の前でアレオーレの形態を変化させていなければ、イブキはこれほどまでに彼女を分解再生することに拘らなかつただろう。昏倒するほど体力を失っていて、かつ意識もないまま、植物の形態を変えてしまうほどの力を放出した彼女だからこそ、イブキはデイモルフオセカに興味を持ったに違いなかつた。

しかも、当の本人であるディモルフォセカは、アール・ダーには帰れないのだと頑なだ。

カナメは半ば投げやりな気分になって、イブキから渡されたメモリースティックを小型大脳コンタクトに突っ込んだ。

白い小部屋の椅子に座って、ディモルフォセカは不安そうにカナメの背中を見上げる。大脳コンタクトという器械を取りつけて、記憶を採取するのだと言う。

記憶の採取？ 何、それ……。

部屋は、床も壁も天井も真っ白なので何だかひどく落ち着かない。先ほどまでじゃれていたアレオーレは、この部屋には決して入ろうとしなかった。

きよときよとと辺りを見回すディモルフォセカに、機材を手にしたカナメが近づく。

「どうする？」

カナメはディモルフォセカの表情をちらりと見てから、唐突に問いかけた。

「どうするって……何を？」

「もし君が家出したことを後悔しているのならば、記憶採取はしない。明日のガイアエクスプレスに乗れるように、今ならば、何とかすれば手配してやれる。家に帰りたくなっただんじやないのか？」

カナメは仏頂面でそう言った。

今朝目覚めて、ディモルフォセカは驚いた。暖かいジタンの日射しだと思ってホッとしたのは勘違いで、カナメの体温で温かかった

のだ。低体温症……森の民が時々起こす症状だ。地下都市に来てから、デイモルフオセカは頻繁にこの症状に悩まされるようになっていた。ここにいてさえ、自分は誰かに迷惑を掛けてしまうのかと唇をかむ。

帰りたくないと言えば嘘になる。だけど、帰れる場所は既になかった。

オーランティアカの家は、デイモルフオセカの結婚話を機に、色々なことがうまく行かなくなっていた。まるで肝心な歯が折れてしまった歯車のように、妙なふうに空回りして、両親とも弟ともぎくしゃくした状態になっていた。それがどうしてなのか、デイモルフオセカにはさっぱり分からない。更に、結婚相手だと政府から指定された相手にも問題があった。彼には将来を約束した恋人がいたのだ。自分の存在が、周囲の人すべてを困惑させ混乱させ、悲しませていた。デイモルフオセカが帰りたい場所は、昔の、姉のアリッサムが亡くなる前の穏やかで幸せだった日々だ。だけど、それはもうどこにもなかった。

「……私が帰ったら、あなたたちは困るんじゃないの？」

こんなことを訊いてしまうのは、自分の存在を認めてもらいたいからだ。自分は居場所が欲しいだけなのだ。これは甘えだ。訊いた途端、そう気づいて後悔する。

「困るのは僕たちではない。分解再生ができなければ、そう遠くない未来で困るのは森の民だ。しかし、それは君が義務や責任を負わなければならぬことではない」

「分解再生ができないと、なぜ森の民が困るの？」

「それは言えない。そう言っただろ？」

「私が協力すれば、森の民の役に立つ？」

「役に立つかどうかは分からない。少なくともマイナスにはならな

い

「やりがいの無い言い方ね」

デイモルフオセカは拗ねた瞳でカナメを見上げる。カナメは軽く肩を竦めた。

「だけど……デイモルフオセカは思う、少しでも森の民の為に可能性があるのなら……。少なくとも無駄にはならないはずだ。」

「ねえ、それって痛いんじゃないよね？」

「……大人でも泣くほど辛いやつだ。痛くは無んだけどね」

「え……」

「正確に言えば人による。辛い記憶が多ければそれだけ辛い。楽しい記憶ばかりならば少しも苦痛ではないだろう」

自分の記憶はどうだっただろう。確かにここ数カ月は、辛い記憶ばかりだ。だけど、それまではずっとアール・ダー村で幸せだったのだ。両親がいて、姉弟がいて……。

「それから、これは言っておかなければならないと思う。大脳コンタクトを使うことによって、森の民の力を失う可能性がある」

「森の民の力を失う？」

「可能性を否定できない」

森の民の力を忌み嫌っていたヒースの顔が浮かぶ。彼はそれを試してみたのだろうか……。

「森の民の力が無くなれば、私はアール・ダーに戻る理由が無くなるの？」

「だから、問題なく帰りたければ今すぐ帰る方がいい」

「……でも、もう帰る場所が無いし……。いいよ。協力する」

カナメの真剣な瞳に少しだけ怯みつつ、デイモルフオセカは答えた。

一瞬顔を顰めた後、そうとだけ返事をする、カナメはデイモルフオセカの頭に機材を取りつけた。

カナメは気まずい思いで、自室のベッドに横たわる。

利用するだけなら、犯罪者だった方がまだ良かった。

少なくとも、居場所がないと家出した少女にやらせることじゃないよな。

あの子は僕とは違う。政府の言うがままに、それも三百年もの長い間、唯々諾々と敷かれた道の上を、ただがむしゃらに走ってきただけの僕とは違う。用意された道を否とすることが三百年前の自分にできただろうか、そして今の自分にはできるだろうか。

デイモルフオセカは小部屋で記憶採取装置を取り付けられている。完璧な分解再生するには、まず記憶を採取しておくことが必要なのではないかと、イブキとカナメは以前から考えていた。森の民の記憶を採取したことは数えるほどしかない。森の民は体力的にばかりでなく、精神的にも繊細だった。略式の簡単な記憶採取であったにもかかわらず、シヨックのあまり力を失った例もある。それ以来、森の民の記憶採取はストップしたままだ。ハル政府は、一人でも多くの森の民を『使える』状態にしておきたいのだ。

記憶採取を始めて間もなく、彼女は涙を流し始めた。記憶採取は近い過去から採取が開始される。ここにたどり着くまでに辛いことがたくさんあったのだろう。予想していたことではあった。

記憶採取装置は、昔のつら過ぎて忘れざるをえなかった悲しい記憶までも残酷なまでに掘り起こす。この装置が残酷なことは、自分が一番よく知っていた。何度この装置に自分の記憶を明け渡した

ことだろう。

彼女は力を失うのだろうか……。

カナメはふと何かを思いついたように起きあがると部屋を後にした。

第十二話

「今日中に、あの趣味の悪い監視カメラを撤去して欲しいんだ」
カナメは休暇中にも関わらず、エリアAにある都市管理センターの窓口に来てきた。

「カナメさん独身でしょ？ 付いてても特に問題ないと思うけどなあ」

顔なじみの職員はメタリックフレームの眼鏡を中指ですりあげながら、ニヤリと笑う。

市の条例で、七十歳以上の独居老人の寝室には監視カメラを設置することになっていた。孤独死を減らす為だと市長は言うが、プライバシーの侵害にも程があるとカナメは思う。

「再生治療を受けたんだ、もう必要ないはずだろ？」

カナメは渋面で反論する。

「今、結構人手不足でねー、最速で三日後ですかねー」

職員は端末モニターを確認しながら言った。

「三日も待てるか。ああ、そうだ、自分で外してもいいんだよね？」

「やめてください」

職員はやけにきっぱりと言い放つ。

「なんで？」

「粉々に分解するつもりでしょう？」

「……」

カナメは絶句する。誰がどういう噂を流しているのか知らないが、どうやら自分は分解魔だと思われるらしい。

分解。確かにこの言葉は、カナメの長い人生の中で大きな部分を占めてきた。子供のころから、ありとあらゆるものを分解すること

に情熱を注いできた彼は、やがて生物をも分子レベルまで分解する分解装置を開発した。逆の過程をたどって、イブキは再生装置を開発した。だから分解再生装置は二人の共同作品なのだった。

分解再生装置は地下都市ハデスの生活を一変させた。狭くて不衛生で不自由だった地下都市は、究極のリサイクル生活を可能とした快適な機能的未来都市と呼ばれるようになった。

この装置のことを語る時、人々は尊敬と畏怖の念をもって、その開発者のことをこう呼ぶ。破壊神カナメ。創造神イブキと。

「おいつ、カナメじゃないか？　なんでこんな所にいるんだ」

背後から自信に溢れた声でハデス地下都市市長ルド・B・ラキニアータが声をかけてきた。カナメはげんなりと振り向く。いつみても元気いっぱい、無駄に眼光鋭い顔を見ると、自分の生気が吸い取られていくような気がする。

「おまえ、まだインターフェース休暇中だろ？」

ルドは顔を顰めた。再生治療後は一週間の休暇が義務付けられている。新しい体と心がインターフェースをとるのに、それくらい時間がかかるからだ。

「ちよつとした手続きの申請だ」

カナメは大したことではないと言いたげに言葉を投げだした。

「手続き？」

「グラブラ主席技官は寝室の監視カメラの撤去を申請しに来たんですよ」

ルドに知れると、色々面倒だと判断したカナメが、適当にはぐらかそうとした先に職員が答えてしまう。

「ほう」

ルドが目丸くする。

「……」

カナメはズルズルと沈み込む心持で、ルドの目が好奇心に輝きだすのを見つめた。

「お前の部屋には、寝室だけじゃなく各部屋に監視カメラを付けてやろうと思っていたのだが。遂に妻でも娶る気になったのか？ それとも恋人でもできたか？ それとも……何か別のアヤシイ趣味ができた訳じゃないだろうな？」

「アヤシイ趣味って、例えば何です？」

カナメは脱力して問い返す。一番性質の悪い人間に見つかってしまったようだ。

「俺がそんなこと知る訳ないだろう？」

「……」

「そうだ、カナメ。あの森の民の母親な、特例で再生者リストに加えておいたぞ？ ただし再生されるのはプランE完了後だ。感謝しろよ。貸しだからな？」

そう言っただけでルドはやりと笑う。カナメはルドを見つめて苦笑った。プランEの完了などいつになるのか……。

「ルド、次の会議の時間が迫っています」

秘書の音が、カナメには天使の声に聞こえた。

「おう、分かってる。じゃあカナメ、また今度な。アヤシイ趣味は程々にしろよ？」

ルドは無駄にさわやかな笑顔を作ると颯爽と去って行った。

だから、何だよアヤシイ趣味って……。

カナメは呆然とその後ろ姿を見つめた。

「カナメさん、なんとか頑張って二日後には撤去できるようにしますから、くれぐれも分解しないようお願いします」

端末のタッチパネルを操作しながら職員が声を掛ける。

「君はなんか誤解してないか？ 僕が何でもかんでも分解するとか

……」

「何でも分解したいと思う訳じゃあないんですか？」

職員の男は声を潜める。

「……君は何を分解することを想像して言ってる？」

カナメは怪訝そうに首を傾げる。

「最近、居住区で起ってる事件を知ってますか？ バラバラ殺人事件ですよ」

男は声を低めて、不気味な顔を作って言った。

「……」

カナメはげんなりした顔で黙り込む。

「どうして犯人はバラバラにするんでしょうね？ カナメさんなら気持ちわかりますか？」

「僕にわかる訳がないだろう？」

カナメは憮然とする。

「ははは、冗談ですよ。いやいや、カナメさんも気を付けてくださ
いね？」

職員はにっこり笑った。

「次に君がバラバラにされてたら、僕を疑ってもいいよ。もっとも、僕は微粒子になるまで分解するのが趣味だから、君だって誰も分からないかもしれないけどね？」

カナメがにっこり笑い返すと、職員は笑顔のまま凍りついた。

二日後の撤去を申請すると、カナメは都市管理センターを後にする。

戻ってみると、デイモルフオセカの記憶採取はワンサイクルが終了していた。ワンサイクルで一年分よりも少し少ないくらいの記憶を採取できる。すぐに機材を取り外したが、かなり消耗している様

子だ。

元々体力的に弱っていた彼女には、それでもかなりの負担らしい。記憶採取を始めてから低下気味だったバイタル・サインは、外した後も低レベルのままでなかなか回復しない。何度か体を揺ると反応はあるので、しばらく様子を見ることにする。

一日ワンサイクルが限度だな。

ベッドを使えば、少しでも楽になるかと思い、寝室の監視カメラの撤去を申請しに来たのだが、藪蛇だったかもしれない。カナメは盛大な溜息をついた。

第十三話

「姉さん、エウオニムス家なんかに行くことないよ。ここに居ればいいんだ」

ホルト……それはできない。それは……できないよ……。

デイモルフオセカはソファの上で目を覚ました。部屋の中は漆黒の闇が支配している。驚いてソファの背もたれから身を起こすと、すぐ傍で密やかな声があった。

「暗いから気をつけて」

「カナメ？ これは一体……」

暗闇に慣れてくると、そこはただ単に真っ暗闇なのではないことに気づく。まるで砂粒を撒き散らしたような光の粒が、天井と言わず壁と言わず床と言わず、辺り一面に散開しあるいは集合し……。光る星雲が渦を巻き、暗黒星雲が宇宙に干潟をつくり、時折流星が涙のように零れ落ちる。

デイモルフオセカは目を見張った。

「ソファに座ったまま振り返ってごらん」

言われるまま背もたれの向う側に目を向けると、遙かあなたにメラメラと真っ赤に揺らめく爪の先ほどの大きさの丸が見えた。

「ジタン……」

「近づいてみようか？」

カナメがそう言った途端、ゆったりとした速度で星が背後に流れ出す。

ガス状の大型惑星の横を幾つも通り過ぎ、暗く凍りついた大地をもつハル型惑星を二つ通り過ぎたところで、目の前に、青く輝く水を湛えた惑星が目の前に現れた。

「ハル……」

デイルフォセカが感極まったように呟いた。

これは人々の記憶の中にあるハルだ。ハルがこんな状態だと、心から信じられるのは、ある意味幸せなことなのだろうとカナメは思う。

森の民の力、それはハルの悲鳴が生み出した能力なのかもしれないと、カナメは密かに考えている。

ジタン末期の大災害から二百年余りが過ぎたころ、ジタンからの有害な光線と熱に耐え、大気を一定に保とうとする能力がアール・ダー村の植物に備わった。その適応力の速さ、能力変化の的確さに当時のハル政府は驚愕した。

それが森の民のなせる技であるということが判明した時、ハル政府は困惑した。

アール・ダー村は療養の村。治る見込みのない虚弱な人たちが最終的に住むことを強要された、言わば姥捨て山的な村だったから。

森の民の力で、僅かに残ったハルの地上は、当初ハル政府が見込んでいたよりも長くその寿命を保っている。森の民の出現がなければ、日に日に苛烈さを極めるジタンの光線の前にアール・ダーはとつくに壊滅していただろうし、地下都市のバイオラングでさえ、順調にその機能を果たすことはできなかつたに違いない。つまり、ハル文明の滅亡をぎりぎりの崖っぷちで留めているのは、森の民だということになる。

森の民たち自身は知らぬ事だろうが、今や、森の民は国宝級の扱いだ。できれば、こんな形では関わりたくなかった。カナメは小さく溜息をついて、ハルの青い光に照らされたデイルフォセカの横顔を見つめる。

映像が終わって、徐々に部屋の明かりが戻ってくると、ディモルフオセカは自分が前と同じ白い小部屋に居たのだと気づく。カナメはソファの足元に足を投げ出した体勢で床に座っており、その横に何かの機材が転がっていた。配線コードが引き抜かれたように剥きだしのままねじれている。

「ディム、今日から君は僕の寝室を使いなさい。監視カメラを外しておいた」

「え？ 監視カメラ？」

「ああ。市長の変な趣味なんだ。気分悪いから自分で外した。そのうちの市の職員が回収しに来ると思う。誰か来たら、君はどこかに……隠れて……て……」

カナメの言葉は次第にゆっくりになり、小さくなり、やがて途絶えた。

「カナメ？」

穏やかな寝息が聞こえる。うつすらと汗ばむ額。疲れているような、苦悩しているような、憔悴した横顔。

この部屋はディモルフオセカの為に空調を切つてある。カナメにとつては暑いのだ。空調の使い方を知らないディモルフオセカは、考えた末、小部屋のドアを開け放すことにした。閉まらないようにドアに椅子を挟む。リビングでフワフワ飛んでいたアレオーレが喜んでディモルフオセカにじゃれついてきたが、彼女が再び小部屋に戻ると再びリビングに戻って行った。余程この部屋が嫌いらしい。

ドアの隙間から涼やかな風が吹いて来る。

アール・ダー村のオーランティアカの家は、大して大きくない家だったが、どの部屋にも大きな窓がついていた。明るい光と風が吹き抜ける部屋。光に満ちた場所。こことは正反対だ。窓は無く、ジ

タンの光も届かない。

昔は良かった。ママがいてパパがいて弟のホルトがいて、小さいころはアリッサムもいて……幸せだった。

「どうしてこんな事になっちゃったんだろ……」

冷えてきた部屋の中、一人身震いする。座ったまま眠り込むカナメを揺する。

「ねえ、こんな所で眠ると体痛くなっちゃうよ？ 私はソファで大丈夫だから、カナメ、ベッドで寝なよ」

「……うん」

返事とは裏腹にカナメが起きる気配はない。

「ねえってばあ」

揺すったり引っ張ったりしているうちに、デイモルフオセカも眠くなってしまい、カナメの隣に座り込んでウトウトし始め、やがて眠り込んだ。

カナメは走っていた。

霧が深いので、どこを走っているのかは分からない。しかし追われているのだと分かる。何故なら、ただ追われているのではないからだ。追ってくる者たちの濃密な殺意が押し寄せる。

追っているのは一人ではない。大勢の足音が迫ってくる。尋常な数ではない。大声で怒鳴っている者もいる。カナメのことを罵っているのだ。

その恐ろしいまでの、殺意を含んだ怒り。

声は叫んでいた。

「殺せ！」

多くのものが叫んでいた。

「あれは有害な化け物だ」

「災いを招く死神だ！」

ちがう！ 僕は死神なんかじゃない！

「違う！」

カナメは叫ぶ。しかしカナメの耳に聞こえたその声はくぐもった唸り声だった。不審に思つて自分の手を見る。それは闇に溶けたような漆黒の掌。カナメは目を見開く。その真つ黒な影のような掌には、骨が……それこそ夥しい数の骨がうず高く積み上がっているのだった。

そうだ……僕は殺した。人を引き裂いて、バラバラに……粉々にしたんだ。

死神だ！ カナメは戦慄して掌の上の骨を放り捨てると、頭を抱え込んだ。

うっ……うっ……僕は何をした？ 僕は、一体何をしてきたんだろっ。

カナメは、慟哭しながら目を覚ました。汗びっしょりだ。

また、いつもの夢だ……夢だ。いつもの夢だ。自分にそう言い聞かせる。

分解再生されてからしばらくは、嫌な夢ばかりを見る。体と心がインターフェースをとるために見る夢なのだと言われる。見るのは悪夢ばかり。座ったまま両手で顔を覆う。

ふと気づくと、傍らにデイモルフオセカが寄り添うように眠っている。

「デйм？ デйм、起きなさい。こんな所で寝ていると体を壊すよ」

これじゃあ寢室のカメラを外した意味がない。カナメは苦笑すると、デイモルフオセカを抱えあげて、寢室へ運んだ。デイモルフオセカをベッドに寝かせると、力尽きたように自分も横たわった。

カナメは、三百年にも渡る、彼の長い人生の中で結婚したのは、ただの一度だけだった。それも半年暮して別れた。その後の政府からの介入はことごとく無視した。

何故かと問われれば、他人と暮らすことが苦痛だからと彼は答えるだろう。干渉され、生活のリズムを崩されると。相手が悪かったんだろうとイブキは言うが、二度と面倒なことはごめんだ。

しかし、事実は少し違う。カナメは薄々自認していることだが、変わることが怖いのだと思っている。心の奥底に沈んで幽かに光を放っている過去を、失う、もしくは忘れる、そうなってしまうのが自分は怖いのだと。

第十四話

濃厚でコクのあるカチャボスープに、新鮮なサラダ、少し焦げ目のついた人工肉のソーセージに焼きたての香ばしいパン。

いつもパンとコーヒーだけで済ましている朝食を、いつもよりバランスよく準備したのは、ひとえにデイモルフオセカの為だった。しかし……サラダはやめておいた方が良かったらしい。

「デイム……やめなさい。デイモルフオセカ……」

カナメは困惑して声を掛ける。デイモルフオセカの前にあるサラダの皿がなんだか変だ。コブからもらっていたエリアEの野菜を適当に盛り合わせたサラダだったのだが、芽吹いたり花が咲いたり、とてもサラダとは思えない代物になり果てていた。

寝ぼけ眼で食卓についたデイモルフオセカがまずやった事は、サラダの上に手をかざすことだった。しかも、まるで操られているかのように、ぼんやりしたままでだ。

デイモルフオセカが手をかざすとすぐに、サラダの皿は白く光ってこんもりと盛り上がり、前述したように、まるで花籠のような状態になったのだった。

「あ……またやっちゃった……」

カナメの声に、デイモルフオセカはふと我に返る。また、言うことは、今までもこのようなことが良くあったと言うことか。

「君はいつも生野菜を見るとそうなるのか？」

「う……私、力をコントロールすることができなくて……」

「生野菜は食べられないって訳だ」

「うっん、全然食べられないって訳じゃないよ？」

あきれ顔で問うカナメに、デイモルフオセカはモゴモゴ説明する。

植物の茎や根の先端にある生長点を除いてあれば大丈夫なのだ。生長点は、もっぱら細胞分裂が行われる部分であり、それがあれば、植物は成長しようとする。植物が成長しようとするれば、デイモルフオセカは自分の意志に関係なく、まるで植物に操られているかのようになり力を放出してしまうのだ。

オーランティアカの家では、デイモルフオセカの為にサラダに入った野菜の生長点を取り除くのは、もっぱら父親の役目だった。役目……というよりは、野菜嫌いな父親が自分の皿から生長点を取り除いた野菜をデイモルフオセカの皿に置いていたと言った方が正確かもしれない。時々、親の目を盗んで、弟のホルトも置いていたようだが……。

家の中で力をコントロールできないのはデイモルフオセカただ一人だったのだ。亡くなった姉のアリッサもコントロールできていたようだから、デイモルフオセカだけが違っていただろう。

「だから、いつもはパパが生長点を除いた生野菜を……むぐっ」

突然口の中にラディックを入れられて口ごもる。少し辛味のあるラディックの清冽な香りが口中に広がった。慌てて口に手をやるうとしたところで、厳しい口調の命令が飛ぶ。

「手を出すな。野菜に触るな。黙って咀嚼する」

デイモルフオセカは、びくりと動作を止めて、コクコクと頷くと咀嚼する。

サラダに関しては、最後のフリルルタス一枚に至るまで、指一本触る事を許可されず、まるで鳥のひなにでもなったようだとデイモルフオセカは小さくため息をついた。

来訪者がやって来たのは、食後のハーブティーを飲んでいた時だった。

「デイルム、小部屋に隠れていてくれ。たぶん都市管理センターの職員だろう」

デイルムは顔を頷くと、慌てて小部屋へと逃げ込んだ。

カナメはデイルムが小部屋に隠れたのを確認するとドアを開ける。

カナメの予想に反して、ドアの外にはルドが立っていた。

「よお、カナメ。ちゃんと大人しくしているか？」

無駄に爽やかな笑い顔には、好奇心むき出しの双眸が輝いている。

「ルド？ どうしたんです？ 何か急用ですか？」

カナメは一瞬瞠目すると、通せんぼをするように立ちはだかった。「監視カメラの回収だ。なんだ？ 取り込み中か？」

ルドは、ドアを塞ぐように立ちはだかっているカナメの肩越しに中を物色する。

「いや、別に。今、監視カメラの回収と言いましたか？ 僕の聞き間違いでしょうね？」

カナメは顔を引きつらせながら問いかけた。

地下都市ハデス市長自ら、監視カメラの回収とは恐れ入る。口実に使うにしても、あまりにも見え透いているだろうとカナメはあきれ果てる。

「聞き間違いなどではない。お前早く外してもらいたがってたじゃないか。俺くらいしか今日取りに来れる職員が居なかったのだ。市の対応が遅いとかケチをつけられるのは嫌だからな。邪魔するぜ？」

邪魔するなと口まで出かかった言葉をぐつと飲みこんで、カナメは目をつぶって溜息をつく。

「でっ。」

ため息交じりにドアをきっちり閉めると、勝手にリビングに入り込んでキョロキョロ見回しているルドに、カナメは問いかける。

「で？ ってなんだよ。監視カメラの回収だと言っただろうが」

ルドは既に寝室のドアに手を掛けようとしている。

「地下都市ハデスの市長が？ 国家公安委員会の委員長が？ 監視カメラの回収ですか？」

カナメの皮肉を込めた口調にルドは爽やかな笑みを浮かべた。

「なんだ？ 気に入らないのか？」

ルドは躊躇いもせずに寝室のドアを開けた。

「ん？ もう外してあるのか？」

「外しましたよ。そこに置いてあります」

カナメはリビングの小テーブルを指差した。

「それじゃあ、それもらってくか。……そうだ、その前に手洗いを借りてつてもいいか？ 年をとるとナニが近くてな」

ルドはニヤリと笑う。

どんな情報を掴んでやってきたんだ？ このオヤジ……。カナメは内心冷や冷やししながら、素知らぬ顔で返答する。

「構いませんよ。どうぞ。それが済んだら本題に入るか、とつと帰るかして欲しいもんですね」

ハデス市長が直々にやって来たというのに、茶の一杯も出さないで追い返そうとするのは、おまえくらいだなとブツブツ文句を言いながら、しかし、ルドは手洗いとは別の小部屋のドアに手をかけた。

「ルド！ そこは手洗いじゃないだろ！」

カナメの動揺した鋭い制止には構わず、ルドは勢いよく小部屋のドアを開けた。

「おや？」

ルドの声にカナメは覚悟を決めて目をつぶる。万事休す……か。
「おい、カナメ、あれはとうとう捨てちまったのか？ 枯れてたも

んなあ。お前もそろそろアイリスを卒業って訳か？」

え？ 枯れてた？ カナメは目を開き、一体何の事かと一瞬考え込んでから、ようやくアレオーレのことだと気づく。当のアレオーレはどこかの物陰に身を潜めているようだ。なかなか空気を読む奴だと感心しながら、用心深く答える。

「割れたんだよ。アイリスは関係ない」

用心はしていたが、動揺していた。動揺のあまり昔の癖でため口に戻っている。カナメはごくりと唾を呑みこんで小部屋の入口から中を覗き込む。そこにいるはずのディモルフオセカの姿は見当たらなかった。

「なーんだ」

「なんだって何？」

「お前のアヤシイ趣味が、ここに隠されているんだと思ったのに」
ルドはつまらなそうに鼻を鳴らす。

「だから、アヤシイ趣味なんてないって言ってんだろ？」

「なーんだ、つまらん」

「そんなことを確認する為にわざわざ来たのかよ？」

仏頂面のカナメに、おまえのその悪ガキ面と言葉、懐かしくていいな、すかして俺に敬語なんて使ってるお前よりずっと良い、と言いながらルドは鮮やかに笑んだ。

ディモルフオセカはドアに耳を寄せて外の音を窺っていた。誰かが部屋の中でカナメと話している声が聞こえる。カナメは都市管理センターの職員だろうと言った。でも、もしかしたら公安ということはないだろうか。ディモルフオセカはじりじりと最奥の机まで下がっていった。カナメが鋭く制止する声が聞こえた瞬間、ディモルフオセカは慌てて事務机の下の奥の方に身を潜めたのだった。

ルドは笑みを浮かべたまま、リビングのソファに腰をおろした。「フォボスがプランEの始動を主張しているのは知ってるな？」
ようやく本題に入ったかと、カナメは神妙な顔で頷く。

数年前、ハルの衛星フォボスにあるフォボス市が、地下都市ハデスから独立した。革新的な市長が立ち、フォボスはあつという間にハル連邦政府から自治権を獲得すると、様々な計画を信じられないスピードで進め始めた。

「プランEの一部始動が決まった」

「一部始動……か」

プランEはエクソダス。つまり、惑星脱出だ。

もう何世代にも渡る長い間、ハル連邦の一般人とファームの民は、この計画を始動させる為に様々な計画を進めてきた。フォボスは、そのプランEの最前線基地だ。だからそのフォボスで計画を進めてきた者たちが、一刻も早くプランEを開始したいと考えるのは無理からぬことではあった。

「人数限定で脱出希望者を募ったんだが、希望者が殺到して百倍にも膨れ上がっているそうだ」

ルドは疲れたように笑んだ。ハデス市長であるルドは、その革新的な流れの重しとなるべく、急速な計画進行の危険性を指摘し続けてきたが、それも限界なのだろう。ジタンはもう間もなく爆発するという根拠のない噂があちらこちらで広まって、民衆はパニック寸前の状態にあった。

「へえ」

カナメは肩を竦める。

「お前、どつするよ？」

「どうするも何も、プランDが終了しない限り、僕はここを動く気はないよ。訊くまでもないだろ？」

「そう言うと思った。今日来たのはその件で、提案しに来たんだ。どうだ？ 生きた森の民を分解再生してみるか？」

「…… 確証のないまま闇雲に分解再生するつもりはないよ」
カナメはルドを睨みつける。

プランDは、言わばエクソダスの為の旅支度だ。脱出する為の宇宙船はほぼ出来上がっている。六隻の船に、ハルに棲息するすべての生物をデータ化して搭乗させる。それがプランDの概要だった。

「今度の流星群はかなり厳しいらしい。今、大気局は大わらわだ」

地表から水分を失い、大気の大部分を失った惑星ハルは、宇宙からの飛来物に対する守りが弱い。防護壁を失ったも同然なむき出しの大地になっている。隕石が流星として燃え尽きることなく地表に到達してしまえば、地表だけでなく、その衝撃は地下都市にまで及ぶ。そうならないように、大気局は常にレーダーで監視し、問題のある大きさのデブリであれば、軌道を変えるか砕くかして衝撃を弱くするという作業を昼夜問わず行っているのだ。

「流星群の衝撃でパニックになった群衆が暴徒化することも考えられる。ハダス市長としてもそれは避けたい。だからプランEの一部始動をハダスも受け入れることにしたんだが、そうなってくると、やはり森の民の事が問題になってくる。フォボスの一部の急進派が森の民を諦めて、その力のみを取り出すことはできないかと言い始めているのを知っているか？」

知っていた。だからこそ、カナメもイブキも森の民の再生に全力を注いでいる訳なのだが……。

「やつらが何をおっぱじめたか聞いて驚くな？ 森の民の力を取り出す為の植物を森の民に創らせようとしてるんだ」

「なんてことを……」

それは、まるで自分の生命力を絞り出す為の機械を自らの手で作らせているようなものだ。考えただけで気分が悪くなる。

「もう、国宝だ、特別保護種などと悠長なことは言ってられなくなっただってことだ」

ルドはそう言つと苦笑した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1520w/>

光の砂漠 闇の迷宮

2011年10月1日03時15分発行